# 第五章　罹災から再建へ

## 一　初代館長野村兼太郎

昭和十九年四月一日付で「開塾以来前例なき難局」によって老齢の教職員が退職を勧告された。就任すれば終身雇傭であった筈なのに、突然退職をいい渡される。教授によっては塾長と激論をした人もいたといわれる。高橋監督もそのリスト中の人物で、名誉教授にまつりあげられる。当然図書館監督の地位も去らねばならない。しかしその後任の任命には手間どった。発表は六月であった。当時経済学部長であった野村兼太郎が後任と定り、発表には四月一日付とあった。公式発表でいうなら、間髪を入れず後任が定まったようであるが、その間二カ月の選衡の合い間があった。小泉塾長の考えたあげくの結果であったといえよう。小泉も野村も故人となったからには推測による外はないが、野村は小泉にあまり信頼されていなかったようだ。元々小泉は慶應義塾では毛並のよい家柄であり、野村はその点、東京日本橋の名は通っていたが、商家の出身でまるで肌合いが違う。野村については野村より先輩で、しかも野村より長命である高橋誠一郎が、野村の生涯を見つめてそれを随筆風に書いている。「私は野村君がその学生生活を終るころから知っているように思い出される。痩せて小さい愛嬌のない青年だった。学校の成績は無論、悪くはなかったが、決して級中で一、二を争う秀才とはいえなかった。しかし向学心の熾烈さは他に類がなかった。教授会が君

を助手に採用したのは、その熱心な学問好きに動かされたのであろう。研究会では阿部秀助君の指導を受けた。」助手の頃は経済哲学に興味を持っていたようだが、大正十一年五月欧羅巴に留学し、十二月バアミンガムでサー・ウイリアム・ジェームズ・アシュレェ教授に会った。野村はその著「欧洲印象記」で語る。「アシュレェ先生は好々爺と云う感じがする。現在の社会や制度に就いても、その外いろいろな点で私達とは考え方が随分違うようだ。その点に於いて極端に云えば隔世の人と云つてもいい。然し未だ二回ほどの面会でよくは解らないが、後進の者には親切であり、話の間々に傾聴すべき言葉も少なくない」そのアシュレェの助言によって、欧羅巴各国を数ヵ月づつ費やす初めの予定を変更して、ケンブリッジ大学キングス・コレッジに入学し、英国独特の学園の雰囲気の中で「英国の社会的発展に於ける都市の発達と資本主義的経済組織との関係について」を纒めて見る気になった。

痩せて小さな愛嬌のない野村は英国にきても孤独であった。小泉・高橋のように留学生同志の交歓はあまりしていない。バアミンガムでアシュレェに会う日にも、時間までは美術館でロセッチの絵を鑑賞した。そして「どんな人間でもある特殊の瞬間、ごく短い、そして極めて稀ではあるが、我々に与える淋しい、たよりないような印象」に感動していた。ところがその直後のアシュレェ教授は人なつこい。異国の青年にも親切な指導をあたえたので、それへの傾斜が甚しかった。経済史専攻の端緒はこの時に始まる。大正十四年二月帰国してからは英国経済史、日本経済学説史、日本経済史、ロシヤ経済史と広い分野にわたっての研究がなされた。それは絶えまない攷々とした努力の結果であった。英国留学中、風邪で病臥中の感想に「先日読んだガルスワアジイの短篇に、老年の美に対するあこがれを書いたものがあつた。人生観でも社会観でも本当に解つて来るのは五十以上になつてからではあるまいか。書物の上で

いろいろな知識を得ても、要するにそれは知識に止まり、又同じ文字に対する解釈にしても、二十台や三十台の理解は、やはり二十台か三十台かの表面的のものに止まりはしないだろうか。それと同じように社会や人生に対しても思索が熟せず、体験に浅いような気がする。人生五十を越して始めて思想は成熟する…常に精進と刻苦とを必要とする。安住に堕することが最も禁物である。体質もあるだろうが、日本の学者はあまりに早く学問的生活を終り過ぎるようだ。」この感想をそのまま、波瀾激動の戦中戦後を通ずる六十四年の生涯を貫ぬき通した。そこが野村の最大の偉い所である。

昭和の初期、慶應義塾の経済学部は小泉・高橋・野村・加田といわれた時代があった。まだ堀江帰一、気賀勘重、滝本誠一、高城仙次郎などの老教授が健在だった頃であるから、前者は花形若手教授の代表というわけであったが、これが小泉・加田、高橋・野村に次第に別れて行った。戦争激化への世態の中で迎合、といっては酷かも知れない。慶應義塾を存続させるためにはそうならざるを得なかったかも知れないが、小泉・加田、それにつづく多数の主流派に対して、高橋・野村は野党的立場にたたされて行った。昭和十八年七月の慶應義塾亜細亜研究所の設立は、人文・社会科学系統の大学の落ち目を救うためであったが、幾分かは軍部に媚びるものでもあった。そして多くの主流派教授は役員となったが、高橋・野村は名目的に顧問たるにとどまった。野村の反骨振りは高橋の回顧にもある。「野村君は戦争直前から戦時にかけて、経済学部長として、慶應義塾の軍国主義化に反抗し、かなり強く義塾当局と争ったようだ。空襲警報などが出た時には、慶應義塾の教職員たちは慶應義塾におれば必ずここに残り、よそにおつても慶應義塾にはせつけて、この建物を火災から守るべきだ。慶應義塾の建物は、尊い先輩の寄附によつてできたものだと

いうことを、かたく塾長から申し渡されたそうである。…野村氏はこの厳命に抗して小泉塾長に向い、こういうさいには学校に残つている先生がおれば、むしろ、早く家に帰れというべきではないか、何といつても一番尊いものは人間である。ことに大学の生命は、たとえ全部ではないかもしれないが、教授にかかつている。その教授たちの尊い生命を尊重して、空襲警報が出たら、ただちに家に帰すべきではないか、建物はむしろ二の次ではないか、こう抗弁したそうである。そうすると、小泉君は居丈高になつて申される「自分はいまの慶應義塾の教授の中で建物より価値があると思われる人物は、不幸にして発見することができない。」野村君はこの一言に憤慨して、私に不平を洩していた。」これは昭和十九年三月頃のことであろう。学生や教職員の応召や勤労動員やによって、人員が減少したため、特設防護団も改組され、教職員も交替で警戒にあたり、三田の山上にも宿直する非常手段をとった。国民服にゲートルをつけた教職員がゴロ寝をして空襲に備えた。この最中に野村が高橋の後任となったのである。うがって考えれば小泉塾長が、その反対派への口封じのためとも考えられる。しかし野村は図書館長として存分の職責を果した。本が好きだったということがその成功の最大原因でもあろう。時に応じての活躍振りは見事であったという外はない。

野村兼太郎

野村は図書館長になったと書いた。辞令ははっきりと図書館長といっている。それまでは監督といっていた。野村が館長辞任の挨拶に「実際に申しますと、慶應義塾の図書館長というのは私からなの

でありまして、それまでは図書館長と言わないで、図書館監督といつて居りました。その意味では以前の館長はつまり、責任が軽かつた様であります。」野村を指名した小泉塾長も図書館にいる頃は監督という名称であった。それを敢えてこの時から館長と変えたのには小泉としての考えもあったことであろう。それは後述するとして、監督の名のできた田中一貞時代にもすでに他の図書館は—東大でも早稲田でも—皆館長と呼んでいた。慶應だけが例外であった。それは長と名付けるものは塾長だけだという慣習があった。その他は大学部法律科主任、普通部主任という風に、外では部長と呼び、校長と呼ぶのを慶應義塾では主任と言っていた、長などという肩肘の張った名前は塾長だけで沢山である。教授を先生といわないで君という、先輩にはさんをつける、先生は福沢先生ただ一人であるのと同じ考えからきていたと思われる。塾長以外にも長がつくようになったのは大学令という法律で法学部長とか、文学部長とかいう言葉を強制的に使わされた以後、やたらに多くなったそうである。（小沢愛圀談）

「発行される本も極めて少い。外国からは勿論まいりません。最初にやりました仕事が、そこの前に爆弾除けの土手を造るという様な仕事で、理事に、その時は西村富三郎さんだつたのですが、その交渉をしたのが館長になつて最初の仕事だつたのであります。誠に館長らしくない仕事でありました」（退任挨拶）稀覯書を地下室に集めて、その前に爆風除けの土手を造ろうというのは高橋時代の構想であった。それをまづ実行したのである。次いで図書館の書庫の最上層にある図書を階下に降ろし、書架を取除いた。焼夷弾による可燃物を無くそうというのである。「屋根裏にあります書架を毀さないと外へ出ないがどうするか、毀しても良いのですかという。まア仕方がない。毀すという事になつたんですが、柄沢さんの英断であれを外へほうり出しました。そのおかげで屋根に爆弾が当つて、上は燃えち

やつたんですけれども、書庫を救う事が出来たんであります」そしてその次が、図書の疎開であった。それらは図書館員の仕事というより、兵隊のやる、労務者のやる仕事の連続であった。そしてそれを無人と混乱の中で行ったのである。

まづ図書館の中に働く人を見よう。十七年中風のために休職になった事務主任安食は遂に回復することなく、十九年九月在職期間三十三年六ヵ月で正式退任となった。安食の後任となった三辺は十七年九月応召して留守であった。しかし内地勤務で千葉あたりに駐屯していたので時々顔を見せた。来るたびに肥って見えたので、軍隊は餌が好いのだろうとうらやんだ。これより先、伊東は十七年七月大学予科図書室係として日吉に勤め、十八年九月一度復帰したが、十二月藤山愛一郎が慶應義塾に寄附した白金台にある藤山工業図書館に再転出した。石川は十六年七月応召、すぐ満洲へ渡って、ずーっと姿を見せなかった。保坂は十九年三月横須賀に入隊し、五月に帰ってくる、太田も同年七月応召して岐阜で訓練をうけ十月帰った。岩崎も二十年四月に一時横須賀に入隊した。

三辺の後任の形をとった太田は明治四十四年生れ、仏文科を卒業して、雑誌三田文学の編輯を手伝い、水上滝太郎に知られ、身体が丈夫でないことから図書館勤務がよいだろうと推薦された。自身は仏文の教員が志望であって、欠勤の教員の代講などには早くから喜んでしていた。性質が温厚で敵がなく、上長のうけも良かったが、あまり事務には秀づるといった型の人ではなかった。であるからだろうか、十九年四月高等部教授から図書館勤務に移った柄沢は図書館主事ということであった。主事という言葉は図書館ではこれが初めてである。もっとも、伊東が十八年藤山工業図書館へ移ったときは、図書館主事ということであった。財団法人藤山工業図書館に主事という役職があって、そ

れを踏襲したのであろうか。

従って野村館長就任当時は柄沢主事、太田、佐々木（良太郎）、国分、井上、吉岡、保坂、岩崎、佐々木（暁秀）、中丸、木内（佳子）、北村（光子）、古川（青香）、といった顔触れであった。柄沢は主事といっても初心であり、実際上の運用は太田がなすべきところであったろうが、太田は虚弱体質であり、しかも七月召集となると館内の統制が乱れ、柄沢に反抗する者が出た。保坂は史学科を卒業して、助手になり、日吉住居址の発掘などを手がけ、また図書館の南洋文献分類目録を望月基金の援助によって、松本信広教授を援けて作るなど、若いが勉強家であり、自信家でもあった。それがホーレイ文庫の購入により図書館の嘱託になり、次で正式に事務員になった。中丸は東洋史学科卒業後、中国に二回に渉って留学し、中国の劇の研究をした。帰国後は商工部で支那語を教えた。この二人が柄沢に反抗した。一ばしの侍であったので、素人の柄沢主事の指図などおかしくて聞けないといったところであろう。あまり反目が激しいので野村館長は十九年十一月保坂を普通部の教員にした。中丸も面白くなく翌二十年三月退職した。その間、古川・北村の両嬢もやめる。二十年二月には井上芳郎が突然死んだ。風呂屋で発病し、九日目に歿った。井上は前述したように、変った履歴の持ち主で、和漢書係に永く籍を置いたが、業務のかたわらというより、本業そっちのけでバビロン・アッシリアの研究をしていた。遅れて勉強する者は人のやらない分野をするに限るというのが、彼の主張である。彼は大言壮語するたちの人なので信用できないという人もあったが、彼の主著「シュメル・バビロン社会史」は戦後再評価され評判になった。二十年四月太田も主事になった。主事は柄沢と二人になったが病身の太田は欠席勝ちであった。柄沢と仲良くやって元気が良かったのは佐々木（暁秀）位であろうか。

図書の疎開については塾監局総務課の昆野和七がその必要を力説していたが、実現することになったのは七月七日、慶應義塾内で図書に関係ある部処の責任者を図書館に集めての会議の席上である。疎開に積極的に賛成なのは書庫を持たない亜細亜研究所、三田の研究室などであり、図書館の決意はやや遅れた。疎開先の見分は九月頃から始められたが、まづ最初に行われたのは新潟県中魚沼郡十日町にある西脇寛三郎所有の倉庫で、十月の終りに日通の手を経て発送され、柄沢主事が用務員二人をつれて現地に行った。疎開図書の大部分は亜細亜研究所と研究室の図書であり、図書館図書としては十六七世紀のラテン図書類や、解部存真図、憲法草案などであった。

十九年の末から二十年の初めにかけて空襲がしきりに行われ、図書館も地下室ばかりに頼っていられない。塾の誇る経済古典書をいよいよ疎開することになった。疎開先は甲府市和田平町寺田重蔵宅の土蔵であった。品川辺の運送屋の親爺を拝み倒して、車二台で三月八日汐留駅に運び、三号ホームに積まれた。ところが翌九日午後十時半警戒警報が発令となり、十日の払暁B29約百三十機が来襲し、汐留駅がやられたという報があった。万事休すと思われたが、九日昼積込んで、夕方発車したとの喜ばしい回答が十二日駅からとどいた。そして十八日、甲府安着の電報がきたのである。他方、甲府の方では用度課長の羽磯武平が待っていたが、荷物がなかなかこない。宿屋の支払も無くなりそうになって心細かったそうである。この頃は空襲は東京・大阪の大都市に限られていて、甲府など地方都市はやられるとは思ってもいなかった。ところが五月をすぎると地方都市も危くなる。甲府からの再疎開を考えているうちに、七月甲府市空襲となり、寺田家も焼けた。倉庫だけは猛火の中に持ちこたえ、軒だけを焼いてやっと助かった。佐々木暁秀が見舞金二百円持って挨拶に行ったが、いかにも気の毒であった。

図書の疎開はまだ続いた。次節で述べる。

## 二　被爆から終戦へ

慶應義塾図書館が空襲で被爆したのは、二十年五月二十六日であった。慶應義塾特設防護団本部総務班長奥井復太郎の「三田本塾空襲戦災状況報告」によると、次のごとき状況であった。二十三日夜から翌日朝にかけての空襲においては、三田山上では西北隅の診療所、山下の考古室、普通部校舎、それからの飛び火と見られる亜細亜研究所の一部の焼失を見たが、すべて木造建物であった。一日置いた二十五日の午後十時十分警戒警報が発令、つづいて二十分空襲警報となった。その時は山上の南側校舎（当時東部第六部隊に貸与中）に被弾し、火は東西に燃え拡がった。その飛び火が図書館の中央屋上北側の屋根に落ち、煙の挙がるを発見し、警防本部員永沢邦男、非常参集者庶務課長富田正文、鈴木良蔵らに学生数名が駈け登って、本館への延焼を防ぐ工作をなし成功を見たのが夜半十二時頃であった。ところが二十六日の零時二十分、第二次爆撃が始まり、無数のエレクトロン焼夷筒は新館西北側から図書館にかけて撒布され、木造の教職員クラブ・食堂・調理場は火焔に包まれ、煉瓦建ての大講堂、図書館八角塔、書庫の屋根等よりも漸次火を噴き出し、大講堂のごときは一時頃に屋根は抜け落ち、三十分にして全焼した。図書館は永沢・富田らが再び挺身して屋根裏の発火場所をその部分だけで喰いとめるのに再び成功したのは一時二十分頃であった。

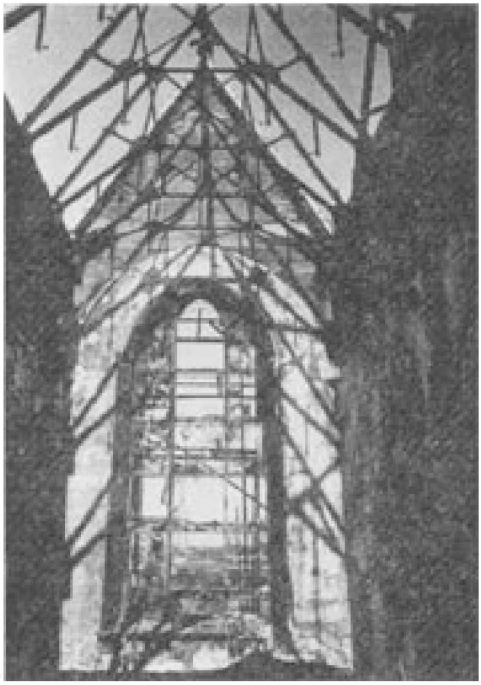
「シカルニ図書館ノ火ハ執拗ニシテ容易ニ鎮火セズ、殊ニ永沢・名取（塾員）等ハ五時頃、書庫ノ安否ヲ点検セル際、屋根裏ヨリ書庫ニ通ズル書籍昇降口の木柱ニツタワリテ、火ノ庫内ニ及ブヲ発見、直チニ消火シタルハ頗ル機敏ナリ

トイフベシ。八角塔・西側新書庫コンクリート屋根ノ如キハ問モナク一応鎮火シタルモ、中央部ノ火ハ漸次下ニ及ビテ、水利ノ悪シキト手不足ノタメ、遂ニ二十八日正午マデ燃エ続ケ、閲覧室・事務関係ノ諸室、地下室ヲ悉ク全焼セシメタリ。此ノ間官設消防隊ノ応援ヲウケシコト四回、軍隊ノ応援二回、隣組ノ応援一回ヲ得テ、ポンプ消火ニツトメタルモ、遂ニ此ノ結末ヲ見タルハ頗ル遺憾ナリ。惟フニ二回ニ亘ル被爆トソノ被弾範囲ノ広汎ナルト、火勢ノ熾烈ナリシトハ、人手ノ不足、水利ノ不良等ト相俟テ、右ノ結果ヲ招来スルニ到レルモノノ如ク、僅カニ図書館書庫、新館、塾監局、鉄筋校舎ヘノ延焼ヲ防止スルニ止マリタルハ、平素警防ノ任ニアルモノトシテ全ク恐懼ニ耐エズ」

当日の警防宿直および非常参集者に図書館員が一人もいなかったことは、宿直の順番が全塾の教職員による割当てによったものであるから、止むを得なかったが、残念な点も無くはない。藤山工業図書館勤務であった伊東が工業図書館の無事を見届けて帰宅し、三田の災害を聞いて駈けつけたのは二十六日午前十時頃であろうか、焼けているのは大階段の辺から記念室へかけてであり、消防ポンプが一台前にとまって二人の消防署員がホースを操作していた。竹梯子が閲覧室から地面に下されて、兵隊がカード・ボックスや机や椅子などを運び出して、前の広場に積み上げていた。まだ事務室も地下室も無事であったから、本職の館員がいたら、もっと効果的な運び出しが出来たかも知れない。カード・ボックスは二階から投げられて散乱しているのもあった。記念室の火も方々で燃えてはいたが、下火であるように思えた。もう少しの水と人手があれば消えそうに素人には思えたが、水槽は空であり、昨夜からの人々は疲労して、語るもものうげに腰をかけていた。消防署の本職二人が僅かな希望であった。ほとんど鎮火しかけた火が、大火後の雨と風とによって、再びあふられて大事になったようである。正午頃、雨が降り出した。折からきた国

分と伊東は塾監局の広間に、投げ出されたカード箱や書類を運んだが、二人ではとても切りがないように思えた。

永沢・富田などの活躍によって書庫が焼け残ったことには感謝せざるを得ない。しかしそれは報告にもあるように事前処置が良かったからだ。「図書館書庫ノ屋根裏ニアリシ図書書架等ノ可燃物ヲ事前ニ撤去疎開シオケルコトモ図書館ノ大半ヲ烏有ニ帰セシメタリト雖モ、書庫ノ安全ヲ護リ得タル最大ノ原因ナリ、事前ニ於ケル是等工作ニ関係セル人々ノ功又大ナリトイフ可シ」屋根裏の図書・書架の撤去に努力したのは柄沢主事で、書架を破壊して焚木とするのに反感を持った人も多かったが、それをやり遂げた英断は「柄沢君の大きな功績であろうと思とります」と野村館長も讃えている。



ステインドグラスの廃址

この空襲にはなお偶然ながら幸運がともなった。二十三日から二十四日の朝にかけての空襲では、木造建築に大型焼夷弾（二五〇キロ）が落ち、二十五日から二十六日にかけてはエレクトロン焼夷筒の被弾であったことで、もしこれが逆であったら、図書館の書庫もあやうかったことの様に思われた。第一日の大型焼夷弾は約十六発、二日目のエレクトロン焼夷筒は建物の屋

上や地上の通路に無数に落下した。

この時、野村館長は自宅にいた。柄沢主事は高等部学生八十名が愛知県豊川海軍工廠に勤労動員されていたのを、監督するため出張していた。図書館の重複図書をリュックにつめて「巡回文庫」と名付け運搬し、休憩中の学生に読ませようとしたが、仕事は閑暇であっても工廠長清水中将は本を読ませる許可をしなかった。一日、学生と豊川稲荷に参詣しておみくじを引いたら、柄沢だけが凶と出た。帰って学生達と座談会を開いているとき、工廠本部から手紙がきたと知らせてくれた。封書だったが開けたら電報で、「トショカンヤケタスグカエレ」とあった。工廠で切符を貰って、座談会に出したふかし芋を背負って、終電車で出発した。豊橋まで座れたが、豊橋からの大船行の列車は満員で立ち通しであった。大船から藤沢の野村宅へ立寄ると横浜が大空襲で全滅だというから、君の家も危いと心配された。程ヶ谷から歩いたが、横浜はまだ火災が消えず臭かった。慶應の学生に途中で会って学校のことを尋ねたが、わからない。その学生の世話でトラックに乗ることが出来て、無事だった鶴見の自宅へ帰った。疲労で横になるとすぐ眠った。目が醒めて三田へ駈けつけると、図書館の地下室からまだ時々ボーッと煙があがっていた。これは柄沢の回顧談である

書庫の火は屋根裏で喰いとめ、新書庫および旧書庫の四階から地階に至る図書は無事であった。不幸中の幸というのはこの事であるが、それが完全に保存されたとはいいえない。屋根をうばわれた書庫は、トタンで遮蔽された四階から上は、火で焼けてまがった鉄骨の上に空があった。平たい屋根裏に溜まる雨水はコンクリートのひび割れや電線を伝って階下に降りてきた。屋根裏の和装本や漢書類は事前に地階に棚板を敷いて横に積まれていたが、火災の際の

消火の水が鉄扉のすき間から流れ込むのを、どう防ぐすべもなかった。要するに完全な形で無事であったわけではない。書庫以外の空き室、物置、廊下などにも様々な種類の本が積まれてあった。重複や廃棄決定の本なども処分が遅れて館内にあった。早く始末しておけばいくらかでも火の拡大を防げたかも知れないが、愚痴というものであろう。太田主事の焼失図書リストが残されている。それによると三階予備室に水上滝太郎、馬場孤蝶旧蔵書。泉鏡花・フランク・ホーレイ旧蔵書一部。三階物置に茂木惣兵衛旧蔵書の一部。八角塔三階に望月文庫未整理定期刊行物。同二階物置に図書館和漢書印刷目録。地階ホールに内藤文庫、フランク文庫の一部。地階食堂に時事新報、未整理雑誌類。地階給仕室に廃棄決定本とある。水上・馬場両旧蔵書は既述した内容のものであったが、全焼であった。泉鏡花は原稿・遺品類は綱町倉庫で無事だった。焼失のものは鏡花の手許にあった洋装本類である。ホーレイ蔵書は大部分書庫内にあって無事だったが、洋書の一部が失われた。茂木文庫も未整理のものが失われた。八角塔の望月文庫の定期刊行物と一括されている中に、ブルーブックの未整理のものが含まれている。八角塔は印刷目録の編輯室であった。従ってここにおかれた既刊目録の焼失は残念ではあるが、それより続いて発行予定であり、すでに出来ていた第三巻歴史・伝記・地理の部の原稿が失われてしまったことは痛恨のかぎりである。この部門は遂に印刷目録が無く、図書館の和漢書分類目録は今日に至るまで完成を見ないでしまった。内藤文庫の一部や時事新報の揃などは被災よりさほど遠くない時期に入ったので、未整理も止むを得ないといえばいえるが、フランク文庫やブルーブックの整理などは永い年月があったので、怠慢といえば怠慢ともいえる。しかし得てして図書の購入や寄贈の受入れには熱心であっても、その後の整理にはそれに伴う人員と費用とが必要であり、内容がむづかしいものには更に優れた人材が要求され

る。それは当然のことであるが、慶應に限らないだろう、どこでも見逃しがちである。時事新報の揃いは一部は従前からある。焼けたのは重複ともいえるが、都内版と地方版との相違があったのだそうである。福沢の創立したものであるだけに、そうした違いのあるものも揃っていて良かった筈である。

五月に東京と横浜に空襲があって被害が出たが、その後しばらくは地方都市に攻撃が加えられて東京は無事であった。空襲警報はたびたび発令されたが、それは地方都市攻撃の帰りの敵機が東京近くを通る警戒のためであった。しかしその間にも東京への再度の空襲は予想された。敵機から撒布された宣伝ビラには虎刈りから丸刈りにするぞとあったと噂された。図書の疎開が引続いて急がれた。これよりさき図書館に寄託されていた南葵徳川の音楽文庫の解約通知があった。この文庫は昭和八年三月寄託され、二万五千冊、新書庫の屋根裏全体を占めていた。音楽書は型に大小あり、厚冊もあれば一枚刷のものなどもあって取扱いには困難した。利用者は従前からの人々が多く、塾教職員、塾生の利用は少なかった。徳川頼貞よりの解約通知は二十年四月十二日にあったが、とやこうするうち爆撃に会った。幸い新書庫は無事であったので、罹災後始めて館長・理事らが書庫を見分した六月四日の翌日から、二日に亘って搬出された。搬出先は千葉県下の呉服屋の倉庫であった。なお同文庫は終戦後散佚されたと伝えられた。或は米軍に接収されたといい、或は古書肆の手に渡ったとも言われたが、終戦後二十五年を経た今日、大木(九兵衛)コレクション南葵音楽文庫という名の下に、日本近代文学館にほぼ完全な形で保管されていることは何より幸である。

図書の疎開には色々な手が打れた。分散疎開という意味から、比較的戦災の懼れ少なき地域に居住、もしくは疎開されている教職員に、無期限の貸出を慫慂した。「義塾図書館所蔵重要図書の大部は疎開を完了致しましたが、残留

図書について研究の利便と兼ねて、危険分散の意を含め、左記により特別長期貸出を行います」の掲示が張られ、細目が規定されていた。これによって茅ヶ崎、鎌倉、鵠沼、大磯方面に住む教授が協力して、図書を自宅に持帰った。又、白金にある藤山工業図書館はその建物の半分以上をその時、海軍省法務局に貸していたので、海軍に頼んでトラックを調達して貰い、医学部の月ヶ瀬温泉研究所に図書を運ぼうという案も出されたが、これは海軍の応諾が得られなかった。又、慶應義塾幼稚舎生の疎開は伊豆修善寺町であったが、その上空を屢々敵機が通過するので、二十年六月青森県西津軽郡木造町へ再疎開することになった。その列車が品川駅にとまったとき、慶應義塾の古記録類を教員に手渡して保管を依頼した。児童への別離にごった返す父兄をかきわけて、列車の窓からの受け渡しであった。

図書の第三回目の大量疎開は長野県稲荷山。高村象平教授の父君の生地で、その邸内の倉庫であった。今度は稀覯書の撰択などと悠長なことはいってはおられない、書庫の四階にあった図書、大体星文庫や田中・望月といった特殊文庫類が主であったが、手あたり次第に荷造りされた。小島栄次、小高泰雄、高村象平などの教授連も手伝わされた。運送の苦労は前より倍加されたが、それでも順調に進んで、柄沢主事が用度課員二人を連れて出立したのが七月二十七日である。高村教授は先方にいて荷物の着くのを待っていた。稲荷山駅に荷物が着いたが、馬力が雇えない。当時、軍需物資の再疎開といって木綿や革製品などの輸送のために軍がそれらを握っていた。やっと頼んで三台の馬力を借り、駅から門まで運んだ。門から庭を通って倉まで相当の距離があるが、車はそこまで入らない。そこで小学校の校長に頼みこんで、小学五、六年生にきて貰って、手送りで倉に積んだ、生徒にはお礼といってあんずを掌一杯づつあたえて喜ばれた。仕事は三時間位かかって、やっと休息していると、駅から線路の間に本の包らしいものが一つ

落ちていると知らせがあって、また引取りに出かけたという。これは高村教授の回顧による。稲荷山疎開が無事終って、出張旅費が各人へ手渡されたのが八月十一日、天皇の終戦放送が行われる僅か二日前であった。

他方、図書館自体はどうであったか。戦災で閲覧室、目録室、事務室、記念室すべてを失い、さし当って事務室を大学の第一校舎一番教室に移した。閲覧室は十九年五月には千代田生命保険相互会社に貸与されていた。学生数の激減もあるが、戦時非常措置として文部省から指示されたことである。従って図書館は事務室のみあって、閲覧室は無かった。焼け残った書庫の図書を教職員と大学院生に館外貸出するのが僅かな仕事であった。図書館の被災と共に館員中にも自宅を失うものが出た。吉岡、岩崎、中丸、それに用務員二人も数えられた。応召も相次ぐ。館員の出欠も定かでなく、信頼感も前に触れたように薄らぐ。焼け残った書庫の中の乱れも、教室に乱雑につまれた什器類を見ても、さすが勤勉を誇る佐々木(良太郎)老人も手をこまねく程ひどかった。こうした状態で終戦を迎えた。

## 三　戦後の混乱時代

終戦をむかえた時の慶應義塾はまさに廃墟の感があった。刻々本土にせまる敵影を充分承知しながらも、大本営発表を待ちわび、後から考えれば馬鹿らしい勝利の情報を流す男の話に、聞き耳をたてていた人々はがっくりきた。すべての人が半ば虚脱状態にあった。そしてそれを倍加するものは慶應義塾の惨憺たる現状であった。塾長小泉信三は図書館被災の同夜、綱町の自宅で大火傷を負い、焼け残った慶應病院の一室に仰臥していた。焼失建物は塾全体では半途(ナカバ)に達した。焼失坪数は三田が五、二〇〇坪(焼失率五三%)、日吉四、一〇〇坪(三一%)、四谷九、一〇〇坪(六四

%）その他を含めて計一八、六〇〇坪（四五%）となり、全国私立大学中、最も戦災被害の大きなものとなったといわれる。

三田山上は鉄筋コンクリートの建物を残して、全部被害をうけた。木造校舎は灰となって、土台だけが輪郭を残していた。ことに廃墟の感を深くしたのは煉瓦造りの大講堂と図書館であった。大講堂は屋根が崩れ落ちて、それをささえていた鉄骨が地面にとどくかのように打ちひしがれていた。不思議に残った前面のユニコーンの表情が、却って無気味さを増していた。しかし何より惨めさを示しているのは図書館の外形であろう。十九年に名誉教授になり滋賀県に疎開し、終戦後東京に帰った幸田成友は「焼けた書庫の最上階の鉄骨が三田通附近から、中天にかかつて見えるのは如何にも悲惨だ」（文芸春秋昭和21・8）と嘆いている。釈迢空は悲しみを歌って「赤羽の橋のほどより、歩み来て　ふとぞおどろく―。灰燼のうへに波たつ　図書館の屋根の　鉄骨―。いらぎて空に向える　恐竜の背鰭なせども、古生紀の岩に凝（コゴ）れる―然（シカ）　古き智識ならめや」（三田新聞昭和22・2）恐竜の背鰭のような鉄骨を露出した屋根と、煤けた煉瓦の色は、山の上に来るまでもなく、赤羽橋のほとりより、それよりさらに遠い処からも眺められた。戦

戦災の図書館

災をうけた街が広いだけに、国電に乗れば新橋駅から品川駅までの永い間、車窓からその情けない姿が見られた。

だが図書館は焼けても図書は無事だった。昆野和七の回想記に、災害の翌朝、三田通りの方から身ごしらえを厳重にした紳士が登って来た。折口信夫教授であった。「まだ燃えつづけている図書館をじっと見つめていた。やがて私を振り返って、ただ一言、本はといった。書庫には火は入っていない筈だと答えると、はじめて笑顔になって何かと話しかけてきた」（「塾監局小史」）教職員の誰れしもが図書館の図書が無事だったことを心から喜んだ。それは平生、図書館には厄介にならぬと豪語していた人にとっても、書庫が無事であったことは救いであったであろう。建物は焼け、木々も緑を失ってしまい、人も放心状態にあったとき、図書館四十万冊の本が無事でいたことは、大学が生きていることを知らせる鼓動が、ここから聞えてきたといって過言であるまい。前にも述べたように屋根を失った書庫は漏水で本を痛めた。しかし終戦まではまだ、それ程大事とは考えなかったが、八月をすぎ颱風襲来の季節がやってくると、もう漏水どころではない、灌水といって良い位だ。折角守り得た図書をこの上汚してはならない。館長の説得もあったろうが、学校当局も財政困難時にも拘らず、書庫の屋根復旧工事には進んで取り組んだ。十月に初まり、廿一年二月に終った。設計は斎藤誠二、株式会社中野組が請負い、工事費用八十六万六千余円であった。しかしこれでも完全ではない。樋がつまったといっては水が書庫に流れ込む、焼けた本館の鉄枠からも水が入る。要するに図書館全体を復興するのでなければ、水の被害を絶やすことができなかった。そこで図書館再興に取組むのであるが、それは後節に譲って、さし当っての終戦直後の状況に筆をすすめよう。

「更にその後の仕事というのは、実に不愉快な仕事が沢山ありまして、その間、館員諸君に非常にいやな仕事をさせ

ていた訳であります（中略）殊に終戦後シビル・カストデアンの中から交渉され、GHQからやって来たり、いろんな事でアメリカ人イギリス人が入り込みまして、いろんな事を言ってくるのが、実に不愉快でありまして、実に敗けるのは嫌だなと思いました。敗けた国というのは、如何に惨めであるかという事を私はしみじみ感じました」（野村退任挨拶）当時の惨めさはその時生活していた人でなくてはわからない。敗戦国民の悲惨さが、大学は勿論、図書館の隅々まで行きわたっていたからである。戦災による校舎の喪失によって、比較的鉄筋校舎が多くて焼失率の少なかった日吉が当然、戦後中心となるべく考えられていたのが、九月二日の降伏調印の僅か一週間後に、日吉校舎は剣付鉄砲に武装された進駐米軍に接収されてしまった。接収校舎は日吉のみに限らない。戦災によって校舎の半ばを失い、接収によって更らに残りの半ばを失った。慶應義塾は僅か戦前の四分の一から立ち上らなければならなかった。終戦の秋は評議員・役員の改選期に当っていたが、社会の混乱で連絡がとれず、任期は延長された。もっとも塾長小泉は病臥して不在であり、槙・西村両理事が終戦直後の激しい変動期の処理にあたっていた。

図書館の事務室は既述のように第一校舎の一番教室にあった。終戦時には野村館長、柄沢・太田両主事、それに佐々木（良）、佐々木（暁）、岩崎、吉岡、国分、木内に用務員一人がいた。そのうち給仕で、十九年の初めに就労禁止令によって去った青木安勝が復職した。十一月には石川博道が三ヵ年の兵役を終えて姿を見せた。石川の回顧談を載せよう。

「復員して出勤したのは二十年十一月一日でしたが、それからまた半ヵ月程休んだように思う。何しろ罹災していたので…。一番教室が事務室で、二番・三番教室は壁が打抜かれて本が置いてあった。仮整理のものや、ホーレイのや、

未整理本であった。太田君は出勤が少なかった。本の購入を担当しており、洋書は三越に頼み、和書は三昧堂に頼んで、風呂敷を持って出かけ、自分で運んで来た。それを整理したのが佐々木（暁）君。岩崎君は雑誌をやり、佐々木（良）・吉岡両氏が和書の原簿やカード書きをやっていた。何しろ本の新規購入は全く少かった。図書館の書庫はしょっ中、雨が漏るので、濡れる本を二番・三番教室へ運ぶのを柄沢さんと自分がやった。ホーレィ氏は初め本が残ったのを喜んでいたが、後に慶應は本を隠くすといって怒った。GHQとの折衝は柄沢氏がやっていた。学生の姿が見えるようになったので新館の二階西側の広い教室（三十三番教室）が閲覧室となり、とり合えず巡回文庫に使った本が並べられ、国分君青木君が出づっぱりで閲覧台にいた。戦争中、台湾拓殖株式会社に貸与した教室が連合国軍に接収され、西側の階段がその出入口になっていた。閲覧室の真うしろの踊り場にドラム罐が置いてあって、そこで進駐兵士が煙草を吸いながら女とふざけて閲覧室がうるさい。自分がビー・クワイエットといったら、オーケーといって上へ登って行ったことを記憶している。」ホーレィ文庫の話が出たが、それは後回しにしよう。接収した兵士は濠洲軍で風紀が悪かった。学生が静かに本を読む部屋の前で、プロフェッショナルな女とふざけ散らすなどとは、考えただけでもなさけないことではないか。

この頃佐々木良太郎が歿くなった。休職届を出したのが二十一年一月でそれから間もなくである。在職期間三十六年八ヶ月、図書館の生字引として、長老として、昭和十九年の老齢者退職からも特別に除外されたこの老人も、其後に起った空襲による図書館の大破、敗戦、物価の高騰、生活の苦しさはその意気を沈ませた。幾分むくみのきた青白い顔で私生活の不平を言う老人を見るに堪えなかった。だがどうしようもなかった。

焼失や接収などによって校舎が少なく、教職員の過剰を一時、図書館に割あてる政策がとられて、予科教員から田中市郎衛門、語学研究所研究員から川上宏一郎、亜細亜研究所図書係から杉田久雄などが相継いだが、短期間で塾内の他へ転任した。人が増えても仕事がない実情にあった。田中は語る。「一週間に二、三日授業のある日に出た。図書館では何にもしない。弁当をたべるだけ。まだ新しい本も出ないし、洋書も入らないので選書なんて仕事はなかった。主事である柄沢氏は書庫にある古い教科書を抜いて廃棄しろと言う。私は教科書をなくすということには反対だったのでしなかった。本当は太田主事が指図役だったのかも知れないが、殆んど出て来たのを見たことがない。何にもすることがないので、ライブラリアンはブラリブラリアンかと言い合った。そんな訳で自分で仕事を探がした。未整理のカードが山と積まれてあったのを誰も手をつけないので、私はそれにタイプした。」川上は教職員の館外貸出係であったが、その頃の状態で一日何人の出入があったろう。杉田は受入れとホーレィ文庫の処理が仕事であったが、ホーレィはたまに顔を出すだけであったから閑暇が多い。閑暇の多いところには不平が出る。当時の不平には生活問題もからんでいたから、堪らない。不平の対象となった柄沢主事は不運な時代の責任者であったと言える。

二十一年十一月「大日本帝国憲法」が廃されて「日本国憲法」が公布され、とうとうたる民主主義の風潮は世の中を明るくする筈であった。二十一年十月には男女共学制実施の指示があり、男子のみの学園だった慶應義塾にも、華やいだ女子学生で賑う筈であった。ところが戦後の混乱は永く続いた。公職追放令は拡大されて、国の指導層にも安定がなかった。焼け跡にバラックは建ったが、衣食に欠乏して人々は右往左往した。学園は復員の男子学生と色彩の乏しい僅かな女子学生が見えた。それは戦争末期、男子の就労を禁止された頃の学園の方が余程、華やかであった。

徴用逃れに教授達の令嬢が勤めにきた。モンペ姿ながらも華やかな衣裳で、一時は百花揺籃とまで思わせるものがあったが、戦後の女子学生にはあまり目のつく服装のものは見当らなかった。教職員も意気が揚らない。給料は物価に追いつかない。学校では焼け木を炭にして配給したり、日吉や志木で作った芋を配ったりしたが、焼け石に水というもの。他の学校と掛け持ちしたり、リュックを担いで物を売ったりした。いそがしい、いそがしいが口癖の人も、教室や研究や事務での多忙でない人もいた。世は麻のように乱れというと大袈裟だが、学園の中も夕方から風俗が怪しくなる。図書館の焼け跡に見張りが懐中電燈を向けると、女の叫びにかえって驚かされる。盗難も頻々とあるので事務室には物も置けない。タイプライターは毎日用度の保管室に預けて帰宅した。図書館の邦文タイプは学生局へ一時貸してそこで盗まれてしまった。

医学部には労働組合ができた。それを一つのイデオロギーによる偏向なるものとして、職員の地位向上、生活安定を目指して全塾的な職員会もできたが、職員会の当初の最重要問題は最低生活維持のための給与体系の確立であった。図書館からも伊東、石川、国分が委員として出席したが、教員と職員との格差はさる事ながら、職員間でも塾監局と図書館とでは差があるのに驚いた。しかし、ただ袋をあけて初めて知る終戦前とくらべて何という相違であろう。この時代は格差といってもそう大して開いてはいなかった。誰しもが最低生活を確保しようとしていたから。野村館長が伊東の給料を見て、自分は三十年勤務して、その間、君を教えた。そして図書館長であるのに僅かこれだけの差であると慨嘆したのを聞いたことがある。二十三年四月の野村の給料は五千五百八十円で、伊東のは三千二百八十円であった。

伊東という名が出たので図書館人事の変化に触れておく。二十一年三月慶應義塾規約改正によって、学部長の更迭が行われ、野村は館長兼任一本となった。主事は柄沢、太田の二人であったが、太田は二十一年四月待望の予科教授になって主事は兼任となったが、出勤はますます少くなり、二十二年三月には長期欠勤届が出され、二十三年六月死去した。もともと丈夫でないところへ、兵役の苦労やら食糧不足やらで、死に追いやったものと思われる。病名は肺結核であった。

三辺清一郎は臨時事務主任心得の昭和十七年九月応召し、終戦と同時に除隊となり、二三度顔を出したが、郷里に一度行くといったまま消息を断った。図書館では彼の帰任を待って、二十二年一月以降、給料は送らなかったが席はとってあった。いつでも復職できるよう準備されていたが、遂に音沙汰がなかったので、二十五年四月に二十一年十二月に遡って退職と定められた。三辺はその後、関西の諸大学で教授になった。

太田主事の長期欠勤が定まり、三辺の復職も危ぶまれるので、柄沢主事は後任を物色し、藤山工業図書館の主事であった伊東を二十二年十一月迎えた。伊東は当時としては珍らしく、慶應義塾内の図書館を異動させられ、所によって違った経験を甜めさせられた。殊に白金の藤山工業図書館は特殊図書館であると共に、公共図書館であり、館員の気風も、閲覧者の種類も全く三田と違っていた。前にはやや喧嘩っぽく、むきになる性質だったのが、大分改められたようであった。伊東の三田への転任の直前に、田中が研究室主事になった。

この頃の館員数は十六名、その職務は

館長　野村　　図書選択

主事　柄沢　GHQ交渉、図書館協会、私大図書館協会連絡事務
同　伊東　総務、書庫整理指揮
同　太田　（病気欠勤中）
国分　仮閲覧室監督
吉岡　和漢書原簿記入、ラベル貼布
石川　洋書原簿記入、書庫整理
岩崎　雑誌受入、配架
杉田　図書受入、配架、ホーレイ文庫後始末
川上　教職員館外貸出
青木　書庫整理
前田（悦子）　タイプライター、カード書入、製本背書き
伊東（栄二郎）
毛利（信吾）
白田（勝巳）　仮閲覧室出納、書庫受付、書庫整理
高橋（豊）　掃除、茶給仕

戦前と戦後と比較して大いなる変化は、戦前は館員といえば事務員まであった。給仕（出納手）、塾僕（用務員）は事

務員に比較して給料の格差がはなはだしかった。それが戦後の民主化で平等になり、給料も生活給を基準としたので給与体系に大幅な変動が見られた。戦前は盆暮には教職員から募金して、彼らの手当とされたのが廃止となった。図書館内の親善旅行に全体が参加するようになったのも、戦後からである。

## 四　図書館復興まで

昭和二十一年四月に学校首脳陣の交替があった。小泉塾長病気のため代理に高橋誠一郎が就任し、理事に永滝松之輔、橋本孝、小島栄次が選ばれた。それは二十年秋改選の筈の評議員選挙が行われないための臨時措置であって、二十一年十月改選が行われた挙句の首脳人事は、塾長に潮田江次、理事に永沢邦男、神崎丈二が定まり、二十二年の一月から本格的な復興事業に取組むことになった。長期復興計画に基づく資金の寄附募集は、戦後の困難なる経済事情にもかかわらず、強力に推進され、塾員も呼応して復興協力会が組織され、また維持会も拠金額を改めて加入者の増加を呼びかけ、さらに金融機関からの長・短期の借入金、「私立学校建物戦災復旧貸付金」や「私学振興会長期資金貸付金」などの低利資金の導入、塾債の発行、寄附保険の採用など、考え得るあらゆる手段をつくして資金確保に努力した。

そして施工の第一着手は図書館の復旧工事であった。戦災をうけた学校中、一番さきに図書館から手をつけた大学が外にあるだろうか。多くの場合、本部をさきにするとか、収入源の校舎を優先的に考えるのが普通であるが、野村館長は大学の生命は図書館にありと主張していた。研究優先、教育次善の考え方の野村館長の主張は貫ぬかれた。し

かしこれは独り館長の説得によるばかりではない。図書館の建物は前々から義塾の象徴のように考えられていた。それが鉄骨をむき出しにした哀れな姿は、塾に関係ある誰しもが、この建物こそ復興をさきにせねば…と考えた上のことであろう。加えてたび重なる水漏れの被害で、改修費を少しづつ支出し続けるよりは、一挙に大改修する得策を財務理事は考えたのかも知れない。五月に義塾創立九十年祭を終えた二十二年九月の評議員会で、図書館の復元工事が決定された。工費五百万円で、翌二十三年八月竣工の見込みの下に安藤組に請負わせることになった。十二月二十六日建築許可がおり、二十九日に上棟式が行われたが、戦後のインフレの真っ最中であり、資材物資の不足の折であったので、工事は難航を極め、遅延を重ね、二十四年五月までかかった。そして当初の予定と精算後の費用とを比べると六百万円の差が出た。いかに困難な工事であったかがわかる。

| | 当初予算 | 精算費用 |
|---|---|---|
| 主体工事費 | 五、〇〇〇、〇〇〇・〇〇円 | 九、〇九六、七六一・四五円 |
| 設備費 | 二、四九〇、一〇一・九四 | 四、二四四、四三四・一一 |
| 資材費 | 五六五、三二四・一三 | 五六五、三二四・一三 |
| 什器費 | 二、八一三、〇八〇・〇〇 | 二、九三六、六三四・七〇 |
| 計 | 一〇、八六八、五〇五・〇七 | 一六、八四三、一五四・三九 |

設計者は、斎藤誠二、主体工事は安藤組、電気は東光電気、衛生関係は城口研究所、閲覧什器は佐藤商店、装飾什器は高島屋が施工した。

新しい図書館が出来るまでにもいろいろ準備が必要であった。まづ焼け残った書庫の整理が緊急であった。前節の

館員の職務配置表を見ても多くの人が書庫整理に回されている。既述のように上層階の書架は防火のため撤去され、毀されていたから、まづ書架を作らねばならない。そして上層の図書は階下に降したり、別室に積んだりしてあったから、書架の出来次第、それを並べなければならない。図書の配架作業は根気が必要であった。それこそ二階以下の書庫には床といわず、廊下にも階段にも本が山と積まれてあった。それを取り崩し、番号を揃えて階上に運ぶ。伊東、石川、岩崎、杉田、青木などが仕事の合い間に手筈を決めて従事した。屋根裏に書架が出来ると地階に積まれた和装本をそこに配架したが、それには体育会の学生をアルバイトに使って柄沢主事が指揮した。地階から五階への階段を多人数で手送りしているうちに、若い学生は面白がって放り上げる。それを取り損んじて下へ落す。大量の移動だから止むを得ぬといえばいえたが、図書を取扱う者には苦痛でもあった。図書館は本を粗末にすると、良く愛書家は言う。こうした光景を見たら当然そう思うだろう。

火の入った旧書庫の屋根裏は鉄骨を飴のようにまげていた。従って復旧後も床がもろいとあって書架を元のように多く入れることが出来ない。そこで従来の図書がそのまま、整頓出来るかが危ぶまれて、使用度の少い本の除籍が計画された。かつて田中が拒否した教科書の除籍がこの段階でも始められた。しかし結果的に見て大した効果をあげなかった。教科書は大体薄いものであるから、容積をあまり節約出来ず、却ってその後、教科書を作る教員たちから参考書を奪った形になって非難された。

書庫の整備の進捗は疎開図書の返還を早めることが出来た。図書館の本を入れた倉の周囲を焼野原にした、甲府の寺田重雄邸のものは最も早く、二十一年の春、石川と杉田が出張して持ち帰った。二十三年六月には稲荷山のものを

柄沢が、新潟県十日町は石川が手配して無事戻ってきた。まだ輸送には困難が伴う時期だけに、それだけそれぞれ苦心があった。稲荷山からの荷物は、その付近は林檎の産地であったので、林檎箱につめられて送られてきた。焚木に不足していた頃なので用務員が荷解きを手伝い、そのかわり争って箱は持ち帰った。大量の疎開図書は割りと早く戻ってきたが、分散して教授宅に少しづつ預けたものは戻るのが遅れた。館外貸出並みに督促すると、頼んだくせに失礼だとおこられた。

図書館復興までの、も一つの大事業は和漢書分類目録カードの焼失を復旧することである。幸い分類した基本カードが一揃書庫にあって無事だったので、それを基に、夏休みを利用して筆写させようというのである。そこで書架と一緒に目録箱の製作がいち早く認められた。これよりさき、分類カード箱の焼失によって、図書館の分類を改正しようとする動きがあった。太田主事が二十二年に基礎案を作り、教員の意見を聞く会が二回開かれた。しかし分類替えするより、書庫内の整備を早くしてくれという声が圧倒的多数で、分類は従前のままとなった。この時の太田案は一橋大学図書館と義塾図書館の分類表を基にして作成したもので、既に出来ているN・D・CやU・D・C或はL・Cなどに基くものではなかった。それに教員に諮問したので、発言の多い分野と少い分野など精粗が出来て、今日から考えると実行しないでむしろよかったと考えられる。

分類カードの筆写は一枚五十銭、それにタイプが一枚十二銭五厘と定められ、二十三年七月から始められた。館員に限らず、職員の収入を補う目的で、百枚一束で、自宅で黒インキのペン書きで筆写させた。物資はあっても、給料では買えない時期だったので応募者は大勢いた。自宅でも出来るというので家族がこぞってやる人も出てきた。百枚

一束を一日に何束も請求した。当初は字の巧いまずいは別として鮮明に書く人に頼んだつもりが、本人でなく家族が書いたのを持ってくるとなると、初めの取極めが守られない。丁寧に見好く書くと、その筆写料は婦人職員が自宅でする裁縫の内職の金額と、ほぼ見合う程度であったのが、一枚いくらとすると多く書くために達筆の人程、崩し字が多い。これでは駄目だというと婦人職員は泣いてしまう。さらには図書館を知らない人が書くのだから、形が変ったり、誤字が多かったり、表題のままの字を普通のものに改めてしまったり、予期しない障害が出て、筆写とタイプの外に校正の必要が出来、これも一枚十二銭と定められ、タイプと校正は館員が行った。休暇中にと考えていたが到底出来ない。校正が遅れるので、翌二十四年三月までに十万枚が出来たにすぎない。大勢の人への仕事の割当て、回収、それに料金の支払など事務も面倒であったので、その後は館員中専任者一人を定めて残りを消化することになった。閲覧者が多く見る分類は十万枚のうちに入っていたから、残りは多少遅れても苦情も出まいと考えたのである。なお、この時採用したカードは標準カードであった。在来のものは慶應独自の大きさで、標準カードよりやや小さかった。標準カードは世界的に定められたものであるから、その後ＬＣや国会カードの導入への便宜にもなる重要な変革であった。それというのも戦時中、カードの購入には図書館協会の斡旋があったが、慶應はその恩恵が受けられない不便が、身にしみていたからである。

図書館における終戦処理期間中の最も不愉快な仕事は、前にもたびたび触れて後述を約したホーレィ文庫の返還事務である。昭和十八年三井信託から購入した猶太系英国新聞記者フランク・ホーレィの文庫は、二十二年二月四日付の連合国軍最高司令官からの命令により返還することになった。前述の石川の談話にあるように、終戦になって間も

なくホーレィは日本に戻ってきた。そして自分のかつての蔵書が慶應の図書館に纏めて収められているのを知って喜んだ。その夫人―日本の女と一緒にきたこともあった。そのうちに慶應は自分の本を隠すといっておこり出した。図書館からいえばホーレィ文庫はまだ未整理であったから一ヵ所に纏っていない。戦災から守るために応急的に書庫の中や、ほかの部屋に積んだりした。また戦後は雨漏りのため移動したものもある。購入した図書だから、他の図書と区別して取扱わないことは当然であった。従ってホーレィ旧蔵書が焼けたものもあれば、残ったものでも書庫の中や、それも一ヵ所でなく、此処彼処に…そして新校舎の二、三番教室や一番教室の地階にもまぎれて入ることはありえた。ホーレィは初め書庫の中に纏められている本を見て喜んだ。そのうち勝手に書庫を歩いて自分の旧蔵本を見つけ出して、慶應は返すのを惜んで隠していると言いだし、何の本がない、彼の本もないと騒ぎ出した。英国公使館員がくる。GHQからも交渉にくる。館長の「敗けた国というのは、如何に惨めであるかという事を私はしみじみ感じました」は心の底からの感慨であろう。

「氏（ホーレィ）は、大きなトラックを持って自己の書籍の箱詰を取りにこられるので、数回にわたってリストをつけて返す。ところが、その数日か一、二週間後にまた見えて、揃っていた本が一冊欠けている。一冊でも欠けていては、全部ないと同様だと私をどなりつける始末、全く泣いても泣ききれない話である。しまいには塾の図書館と教授の私宅をM・Pと日本の警官を使って家宅捜査をするとまでいう。」（柄沢回顧「三田評論」昭和36・7）

慶應図書館が善意で三井信託から買って保存したのに、ホーレィは悪意で慶應が隠くすように宣伝するのは実に心外であった。もともと、買った当初から目録と図書とは一致しないで、スタインの本などは明らかになかった。三井

信託から買ってもホーレィの夫人の父と称する人から、あれは自分の買った本だから、慶應でいらないものは夫人の生活のために返してくれの交渉が再三再四あった。それにもし応じていたら、なお慶應は悪人になったであろう。それらの本が終戦前、架蔵されていた書棚は、図書館が直接夫人から買ったので、夫人にも幾分かの金が渡った。ともかく分散されず、戦災で損傷はあったものの、相当の分量が纏って残っていたことは慶應が買ったればこそで、感謝して然るべきであるのに、教授の家を捜索させろとか、図書館に元から所蔵されていた本―津田左右吉のものなど―を自分のものだと強引に持ち返ったりした。また昭和八年に慶應図書館寄託を解約した亜細亜協会の旧図書を古本屋で見つけ、この通り慶應は預った本まで売るなどといい触らした。戦勝国人のホーレィの言い分は皆正しく、慶應の主張は全部否とされた。

交渉は永くかかった。「三井信託からこの件について最初に私を訪ねてこられたのは、同社の長岡美一君であり、その後森本文夫、池田正男、伊藤正孝等担当者も変り、シヴィル・プロパティ・カストディアンの係官も幾度か変った。その係官の方々も私を訪問される度毎に、「本当に困ったことだ。アメリカ人同志なら良いのだが」といわれた。これはホーレィ氏が英国人だったためであると思われる」（柄沢回顧）二十二年二月二十一日付のシヴィル・プロパティ・カストディアンへの報告では「一、総数買入和漢書一四、六四三冊、洋書二、六三〇冊。二、既に返還せる冊数和漢書八、五三九冊、洋書七四二冊。三、疎開中のもの和漢書二七冊」洋書の返還冊数の少いのは大部分、三階予備室に置かれて焼失の憂き目を見たこと既述のとおりである。

「尚現在調査探索中の図書にして来る二月二十八日迄に判明せるものは当日これを返還すべく努力中なり」戦災をう

けた後の混乱せる書庫の中の状態は、当時いた人でなければわからない。従ってその探索が長びいた理由もわからないだろう。整理は空間があってこそ整理が出来るのであって、空間の全くないところは、積み重ねの移動にすぎない。「敗戦国民は総司令部の命令に従え」とホーレィに怒鳴れながら、その積み重ねの山をひっくり返して探し、二十八年八月末返還図書のないことを正式に解答した。ホーレィ文庫の全決済は三十五年八月、日本政府から補償金が八十五万七千九百五十二円、本塾会計課に入ってやっと終了したのであった。

ホーレィが慶應から強引に持ち去った本は三十六年四月東京美術倶楽部において展観入札が行われ、慶應義塾図書館の蔵書印のある本が日本各地に散ばって、他の大学や愛書家から問合せがきた。それらの本は調査した上、ホーレィ旧蔵のものはその旨記した符箋を張るとか、消印を押すとかの対策を施した。ホーレィへ返却の際、せめてそうした措置がとられなかったかの問もあったが、以上のようにホーレィ自身強引に持帰ったものもあるし、また一方、当時の図書館は生え抜きの図書館員がいなくて教員たちが主要部分を占めていて、気付かなかったともいってよいであろう。

最後に三十三番教室の仮閲覧室の状況を報告しておこう。二十年十一月、初めは巡回文庫本をならべたが、おいおい教養書・新刊書なども閲覧に供した。しかし二十二年三月調査では和漢書五百三十三冊、洋書百十三冊、計六百四十六冊という僅かさであった。にも拘らず、学生の利用は漸増した。多くは字典を借りて勉強するとか、住宅事情の不便のためであって、閲覧時間の延長を求め、三時が四時閉室に改められたのは、同年十一月であった。十二月にはGHQより米軍兵士用図書二箱が寄贈になった。赤や青など色彩のケバケバしいチャチな本ではあったが、内容は英

・米の現代作家の小説などあって、文学部の学生に喜ばれた。翌年三月にはその図書の利用状況の報告を求められた。こういうことは在来の日本の慣習にはないことである。閲覧室に置いて自由に閲覧せしめ、特に学生には雑誌類が喜ばれている旨返答した。

焼け残った書庫の図書は教職員と大学院生には館外貸出された。さすがに終戦を境に貸出が増えた。十九年度は三千二百四十五冊であったのが、二十年度には五千四百二十二冊にはね上った。図書の新規購入書は多くない。にも拘らず物価の騰貴は図書費を倍加させている。十九年八、三三五円。二十年二一、三三二円。二十一年三五、〇六〇円。二十二年一五一、八九七円。二十三年六八四、五八二円。二十四年一、三八三、七一〇円。塾図書館の窮乏のどん底とでもいうべき時期にも慶應義塾を愛する人からの寄贈は絶えない。大島雅太郎の香果遺珍千三十一点、加藤郁二の漢詩関係書二千二百十六冊、小島順三郎から徳川時代の和本を主とせる千四百余冊などは大部のものである。

## 五　戦後図書館の発足

慶應義塾図書館の大修築工事が終って落成式が挙行されたのは昭和二十四年五月五日であった。この時から図書館の戦後が始まったといって良いだろう。書庫の整頓や目録の整備もまだ引き続いてはいたが、慶應義塾図書館規程も定められ、大学図書館として相応の蔵書の充実という野村館長の抱負も着手された。それらを述べる前に再建された図書館を概観しておきたい。

五月五日の落成式は木造校舎四号、五号館の新設披露を兼ねて行われ、塾生主催の復興祭にも重なっていたので賑

図書館復興落成式（演壇で挨拶する野村館長）

やかであった。午前十時三十分から大閲覧室で潮田塾長の式辞、野村館長の挨拶、続いて工事関係者への表彰・感謝状の贈呈があって、完成披露の茶話会が催された。会するもの東京三田会々長金沢冬三郎ら三百名、進駐治下の事であるから、GHQの軍人家族の顔も多く見えた。招待者には「図書館並大学校舎落成記念」絵葉書が配られた。

再建された図書館は復旧ということであったが、こまかなことでは数々の相違が見られる。黒田鵬心が褒めた入口広間の大理石の柱と大階段の間に、コンクリートに蛇紋石をはった二本の柱が補強のために建てられた。そして階段の突あたりの見上げるようにそそり立ち、荘厳な感じをあたえたステインド・グラスが無くなって、その跡には透明な硝子が張られてあった。「ペンは剣よりも強し」を象徴した美しいものであっただけに、それを知っている人には寂しい限りだが、半面明るくなり、内部の淡青色の壁面と相まって爽快な気分をただよわせた。後年東京タワーが芝公園に建つと、その全

容が真正面にこの硝子窓に入って一幅の絵ともなった。再建された当座しばらくわからなかったが、毎日そばの石段を登り降りするうちに、「八角塔の形が変らないのだろうか」と不審がる人が出てきた。図書館の外形は焼け落ちたわけではないから、形そのものは変るわけはないが、言われて見ればその通りで、あれかこれかと考えた挙句、それは八角塔の上の避雷針が前のより太く短くなったことが原因らしい。旧のは細く長く、そして方向を示す装飾が添えられていた。また正面二階の露台の遙か上方に、煉瓦の中に丸くふちどられた白いペンの浮彫りがあるが、その周囲が脱落していて、完成された外観と何やら不調和なものが感じられる。しかしこれは戦火から再建された建物たることを記念するために故意に作られたものだそうである。さらにまた、建物の背面から図書館を見て気づくことは屋根の形が変ったことである。旧は前と背のスレートの急な斜面の間に、ゆるい傾斜のトタン屋根があって、その周囲に鉄さくがあった。そこへは屋根裏から垂直の長い梯子がかかっていて、蓋を明けて人が屋根の上に立てた。戦前はよく館員がここから遠く両国の花火を見たものである。今はスレートがトタンに変り、登れる仕掛けもなく、背面から見ると何か不自然な突起したような屋根に変っている。またこまかいことだが閲覧室の机には福沢諭吉著述書の木版がとり去られて、ただ単なる衝立てに変り、その上に立てられた青い傘の電燈は、机の隅から隅まで照らす横に長い螢光燈に変った。福沢先生の木版が無くなったことを惜しむ人もいる。だが半面、摺られた黒い版が無くなったことは陰気さを少くし、螢光燈は青白いが落着いた光が、心をなごませ、夜の読書を快適なものにしたと言う人もいる。

ここを屢々利用する人でも、ちょっと気づかない気の配りようを再建設計者はしている。ゴシック式建築の気分をそこなわないよう、内部の装飾や色彩に細かな注意をしている。閲覧室の円輪型のシャンデリアのその円輪の中に四

つ葉のクローバーの模様の透し彫りがある。出納台の木彫にも、閲覧机の縁飾りにも、記念室の椅子にも、それらが変化を見せて鏤ばめられている。背面の光を考えて、階段のドームの天井が淡緑色、四壁が淡青色と変化を見せている。こうした点は数々ある。「仕上工事を良心的、高級なるものとした」設計者斎藤誠二の功績であろう。

だが、八角塔の避雷針の太さは建築学の美観の上からその後も問題となり、改造を望む声は絶えず起っている。またスティンドグラスの復旧も古い塾員の気にするところで、東京タワーが一幅の絵ともなろうが、江の島土産の硝子の中の竜宮城みたいにも見え、嫌がる人もいる。しかしその再建には四十五年度の計算でも二千万円かかるそうである。

建物の復旧と同時に館員の復旧もすみやかに行われた。太田主事を失って、その後任に石川がなった。川上・杉田は高等学校と幼稚舎に教員となって去った後も、すぐ埋められ、一挙に戦前平時の人員になった。大学を出たばかりの館員が、仮事務室から新しい建物に、机や椅子や図書などを手おくりで運ぶのは楽しい仕事であった。建物も新しい、人も新しい、新規採用には坂本典、坂本幸児、内田貞夫、大谷愛人、雇員には太田正子、落合喜久子、古沢美和、小林久子、三輪田知子、それに出納手四名、傭員三名増員され、館長以下用務員まで二十九名を数えた。

五月九日開館。開館と同時に学生のデモがあった。図書館の入館には二十四年度の学生証の提示を求めたのである。つまりその年の学費を納めたものに限るとしたのであった。この事は小泉時代にもあった。学費納入をすみやかならしめんとする学校当局の要請に共に基づくものであったが、小泉時代は自治会が騒いでも結局はうやむやに終った。しかし二十四年のときの学生は戦場帰りの復員者が多く、また左傾化のはなはだしい時代でもあった。主として柄沢主事が矢面てに立って接衝したが、収まらない。館長が図書館入口で学生に取り囲まれて、結局、塾生たる証明

があれば新学生証でなくとも入館出来るということで決着した。学費未納の学生も継続の意志あるときは、教務で証明書を発行するというのである。

六月三十日記念室で落成の祝宴が前館長を招いて開かれたが、出席した客人は高橋誠一郎のみであった。小泉信三は火傷もいえて外出できるまでに回復していたが、野村館長の招聘には応じなかった。散歩の途次いつも見ているから…というのが拒絶の理由であった。野村に対する個人的反感であるのか、その頃学内に反小泉の風潮のあるのを知ってのことか、今となっては知る由もない。

七月十八日「慶應義塾図書館規程」が制定された。従前の図書館規則は閲覧者に適用される閲覧心得にすぎず、図書館自体の管理運用に関するものではなかった。図書館規程が利用規則にすぎないのはひとり慶應義塾ばかりでなく他大学もそうであったから、此度の組織に関する規程はその点、画期的なものと言えた。そしてこれが昭和二十五年三田情報センター成立まで、多少の改訂は加えられたが、基本線としては存続していたから、全文を掲げよう。

慶應義塾図書館規程

第一章　総　則

第一条　本塾に慶應義塾図書館を置く

第二条　慶應義塾図書館（三田）を本館とし別に分館を置くことが出来る

第三条　本館の管掌する図書は次の通りとする

一、本館備付の図書

二、分館備付の図書
三、大学附属の研究所及び研究室の図書

第四条　慶應義塾図書館に図書館商議会及び図書館連絡委員会を設ける

第五条　分館の規程は本館の規程に準ずる

## 第二章　職　員

第六条　本館に館長一名を置く。その任期を二年とする。但その重任を妨げない

第七条　館長は学部、附属学校若しくはその他の附属機関の長を重ねることが出来ない

第八条　館長は館務を管掌し館を代表する

第九条　館長は図書館商議会に諮り塾長が之を任命する

第十条　慶應義塾図書館に副館長若干名を置くことが出来る。その任期を二年とする。但しその重任を妨げない

第十一条　副館長は館長を補佐し、館長事故ある場合には館長の職務を代行する

第十二条　分館に於いては副館長は常時館長の事務を代行し、対外的にはその分館を代表する

第十三条　副館長は教授、助教授若くは主任司書中から館長が推挙した者を塾長が之を任命する

第十四条　副館長は学部、附属学校若くは他の附属機関の長を兼ねることが出来ない

第十五条　慶應義塾図書館に館長及び副館長の外に左の職員を置く

一、主任司書
二、司書
三、司書補

四、書記
五、出納手
六、技手
七、傭員

第十六条　主任司書は司書として在職三年以上の者とする

第十七条　司書となることを得る者は左のいづれかに属するものとする

一、高等学校程度の図書館学校を卒業し、本館又は分館に五年以上勤務した者
二、大学に於いて図書館学を専攻し、且つ卒業後一年以上の実務の経験を有する者
三、大学若くは専門学校を卒業し且つ図書館事務に相当期間従事した者
四、その他図書館事務に相当期間従事し館長の特に適当と認めた者

第十八条　司書補、書記等に就いては別に定める内規に依る

第十九条　慶應義塾図書館に嘱託若干名を置くことが出来る

## 第三章　図書館商議会

第二十条　慶應義塾図書館（三田）に図書館商議会を設ける

第二十一条　本商議会は館長の諮問機関とする

第二十二条　本商議会は各学部からそれぞれ推挙された二名づつの教授若くは助教授、館長、副館長及び主任司書によって構成される

第二十三条　本商議会は毎年一回これを開催する。但必要ある時は臨時に館長これを開催することが出来る

第二十四条　会員の任期は二年とする。但その重任を妨げない

第四章　図書館連絡委員会

第二十五条　本館、分館（研究所、研究室等）の相互の連絡のため図書館連絡委員会を設ける

第二十六条　本委員会は館長、副館長、主任司書（研究室主事）その他、館長の必要と認めた者をもって構成される

第二十七条　本委員会は年三回これを開催する。但必要ある時は臨時に館長これを開催することが出来る

第五章　事務分掌

第三十八条　本館に左の部、課を置くことが出来る

- 総務課
- 総務部
  - 庶務、会計課
  - 製本、騰写課
  - 渉外課
- 図書部
  - 受入課
  - 分類課
  - 目録課
  - 函架課
  - 定期刊行物課
  - 文書記録課
  - 館内閲覧課

貸出部―館外貸出課
　　―相互貸借課
調査部―読書指導課
　　―目録編纂課
　　―綜合目録課
　　―書庫調査課

図書館学研究会

一、慶應義塾図書館（三田）に図書館学研究会を設ける
二、本会は司書養成の機関とし本館及び分館に勤務する者を主たる会員とする
三、本塾教職員であって図書館学に興味を有し館長の適当と認めた者は本会の会員となることが出来る
四、本会は随時これを開催し、会員相互の研究発表を行い又塾外から講師を召聘して随時講義を行う等会員の資質の向上を図る
五、会員中本館若くは分館に勤務する者は研究調査のため出張することが出来る。出張しようとする者は予め研究主題を館長に届出て、館長の許可を受けなければならない
六、研究題目によっては小委員会を設けて研究審議することが出来る

この規程の分析や説明に入る前に、この規程の成立過程を語ろう。昭和十九年六月野村館長が実現した直後、既にこの構想があって、規程案が作られた。それは三規程に別れる。「慶應義塾図書館図書管理規定」「慶應義塾図書館職制」「慶應義塾図書館協議委員会規定」で野村館長就任して柄沢主事らと協議して草案が纏められ、もし承認されれ

ば館長就任と同様に四月一日制定となる予定であった。この時の草案と二十四年の規程とは異る箇所も多いが、根本思想は一つである。それは図書館監督という名称を、図書館館長と改めて任命した小泉塾長の考え方が反影していると思われる。「実際に申しますと慶應義塾の図書館長というのは、私からなのでありまして」という前述した野村の自信は、「高橋先生がおやめになる。でその後一寸小泉さん考えておられまして、私、実際図書館にたづさわりましたのはおくれまして七月だったと思います」小泉塾長がしばらく考えての挙句に任命された。小泉塾長はこの時、野村にじっくり意見を述べたのであろう。小泉の口からは何も語られていないが、野村が館長就任と殆んど同時に作製された、全塾的な図書館構想を打ち出した規定は、それを物語るものと思われる。

小泉塾長の図書館観の変化の動機をなしたものは昭和十一年八月から十一月にかけて、ハーバート大学創立三百年祝典に参列のため渡米し、その機会に米国の主な大学を見学したことにあるだろう。その時の見聞は「アメリカ紀行」に収められているが、小泉はかつて留学して見た欧羅巴の、研究・保存の図書館とは違った図書館があることをこの時初めて知った。米国のカレッジの学生は授業時間は少ないが、自分で読書すること、殊に図書館を利用することが多いこと、そしてそれに対しては「よく教え、またよく奨励している」つまり利用者へのサービスが行きとどいているのに感服した。そして「大学の図書館に恐ろしく立派なものが多い」と言っている。九十九日間の旅程では、そうした外見的なことの観察のみで終っているが、各地で大学に関する書類を渡されたから、その後アメリカの図書館の大学内における地位などについても知ることが多々あったことであろう。チーフ・ライブラリアンの重要性などという言葉を小泉の口から聞かされた何人かが今日でもいる。野村は小泉の意を体して、慶應義塾内におけるチーフ

・ライブラリアンとしての抱負を実行しようとしたのである。

十九年七月一日に図書館協議委員会が開かれ、七日には図書館連絡会議というのが開かれた。それには三田の図書館の外に、藤山工業図書館、医学図書館、それにアジア研究所や三田の研究室の主な人を集めた。議題は図書の疎開の意志があるかどうかということであり、あれば協力してやろうという、野村館長の三田の図書館は本館だという意識から催されたものであった。また慶應義塾のものになった藤山工業図書館には十九年四月に、工学部長谷村豊太郎の館長兼務が発表されたが、その後野村は慶應義塾から派遣されて工業図書館に勤めていた、佐藤信彦や伊東弥之助に向って「本当は自分が館長なんだ。小泉塾長からそういわれた」と語ったことがあった。伊東は一つの図書館に二人の館長がいるということに戸惑ったが、明敏な佐藤は中央図書館長（当時はそういわなかったが）として、藤山工業図書館長の上にある館長だと、すぐ理解したと言う。

この時の三規定案のうちの「図書管理規定」は、二十四年制定された規程の中の第一章に当り「職制」は第二章に「協議委員会規定」は第三章に相当する。制定規程の第一章は簡単であるが、「管理規定」は詳細である。第一章は簡潔すぎて後々まで論議を呼んだ。例えば「本館の管掌する図書」とはどういうことをいうのか。それが草案で終った「管理規定」には詳しく語られていて、求むる処を説明している。煩瑣にわたるが全条を記す

慶應義塾図書館図書管理規定（案）

第一条　慶應義塾図書館ハ慶應義塾大学所属ノ図書ノ管理ニ関スル事務ヲ掌ル

第二条　図書館ノ管理スル図書ヲ分チテ左ノ二種トス

一、本館備付ノ図書
二、研究室研究所備付ノ図書
三、

第三条　研究室研究所ニ於テ図書ヲ備付クル場合ニハ当該研究室研究所ノ主任又ハ部長ヨリ所定の図書備付証書ヲ本館ニ差出スヘシ

第四条　前条ノ図書備付証書ニ記載ノ図書ノ購入ニ対シ、図書館長コレヲ承認シタル場合ニハ本館ハコレカ代金支払ノ手続ヲ取ルヘシ

第五条　研究室研究所備付ノ図書ハ当該主任又ハ部長ソノ保管ノ責ニ任ス

第六条　図書館長ハ管理上必要アルトキハ本館職員ヲシテ、前条ノ図書ヲ調査セシメ又ハ一時コレガ交付ヲ求ムルコトヲ得

第七条　本館ハ第三条ノ図書備付証書ニ基キ図書原簿・索引目録等を作成シ、館内ニ備付クルモノトス

第八条　研究室・研究所ハソノ保管ニ属スル図書ニ関スル事務ヲ掌ラシムルタメ、一名以上ノ図書委員ヲ置キ本館トノ連絡ニ当ラシムルモノトス

第九条　慶應義塾北里記念医学図書館及ヒ同藤山工業図書館ハソノ購入図書ノ「カード」ヲ一葉本館ニ送付シ、本館ハコレヲ館内ニ備付クルモノトス

この草案の第二条の三の内容が空白であるのは医学と工業図書館を加うべきかどうかが、未確定であったからであろう。また第八、第九条はその後削除されたようである。

これを見ると全塾に渉る図書管理を慶應義塾図書館が行おうとしたことがわかる。しかし十九年という戦況の逼迫した実情から、三田から遠く離れた医学と工業図書館をその傘下に入れることを迷い、また人員の少い折から図書委

員を強制的に置くことをためらったものと見える。従ってこの時は三田の図書館と三田の研究室、綱町の亜細亜研究所に限り、その三ヵ所の図書購入には図書館長の承認を必要とした。そして図書館で図書原簿に記入し、索引目録を作成し、この限りでの綜合目録を館内に備えようと計画した。図書原簿などは新たに注文され、用意が出来ているところから見て、研究室・研究所の同意が得られたと解されるが、戦局の推移は実現までには至らしめなかった。せっかく作られた原簿類も書き込むこともなく、白紙のまま、今に残っている。

「職制」(案)は規程第二章より簡潔である。八条に別れ、館長は任期二年とし、その職掌は「図書館ノ事務ヲ監理ス」と簡単に書かれ、職員には主事、司書、司書補、それぞれ若干名を置き、それぞれ職掌を定め、なお事務上の必要から嘱託、雇員を置けるとあるのみである。従前の監督、事務員、雇員の名称からいえば、館長、主事、司書、司書補の名称の採用は非常な変化であり、館長の任期を定めたのも画期といえる。「協議委員会規定」も規程第三章より簡単である。協議委員は館長の依嘱に委ね、「館長ノ諮問ニヨリ館務ニ関スル事項ヲ協議ス」とあるのみである。

## 六　「慶應義塾図書館規程」

昭和二十四年の「図書館規程」は、戦後の革新的な条項にみたされていたから、常務会・評議員会でも論議を呼び、説明のために柄沢主事の出席を求められた。この規程の革新的な点は三つある。一は中央図書館制度の確立、二は司書・司書補の身分、三は館長を選挙による推薦である。

まづ第一章総則において三田の慶應義塾図書館が本館で、別に分館があることを言い、管掌する図書の範囲を本館

・分館の外、大学に付属する研究所・研究室とし、図書館商議会と連絡委員会を設けて全体の統制を図ろうとした。しかしこの中央図書館的構想はこの時はじまったことではなく、野村館長就任当初よりのものであり、それは小泉塾長の意向に添うものであったことは前節に詳述した。本館分館との関係は

- 慶應義塾図書館
  - 慶應義塾図書館（三田）
  - 北里記念医学図書館（四谷）
  - 慶應義塾藤山工業図書館（白金）
  - （図書館日吉分室）（日吉）
  - （工学部図書室）（小金井）
- 図書館商議会
- 図書館連絡委員会
- 研究室・研究所

慶應義塾図書館館長は図書館商議会に諮って塾長がこれを任命する。任期二年。各図書館には副館長がいて、館長を補佐する。館長は三田の館長を兼任し、分館の副館長は対外的には館長と称する。副館長は館長が推挙したものを塾長が任命する。連絡委員会は相互の事務連絡のために設けられ、館長・副館長・主任司書および研究室主事を以て構成された。

規程第三条の図書の管掌という言葉は曖昧であって、後々論議を呼んだが、十九年の規定では管理という言葉を使って、図書購入の承認と支払の手続、図書原簿記入、目録作成を図書館が行い、研究室・研究所の長はその保管の責任を持つのみであった。ところが管掌は単に図書購入の承認権をのみ図書館長が持つということで、本館は館長に図

書の選定権があったから問題はないが、分館では副館長が選定し、会計支払請求証のみ本館に回ってきて、館長の承認を求め、その認印を得て確認とされた。研究室・研究所にあっては購入決定図書の請求証を主事が取纏め、館長に提出して、決定の認印を得た。つまり全塾にわたり館長の承認がなければ図書が備付けられないわけである。しかしこれは原則であって、遠隔の地にある医学図書館や、後に出来た日吉研究室などは当該地区の副館長が館長代理として、承認印を押した。図書購入に図書館長の承諾を必要とするということは、図書の重複を避けたい。図書館が遠く離れている場合は止むを得ないとしても、同じ三田の山に何冊もの同一図書を所蔵するのはもったいない、という考えに基づく。例えば一と頃アメリカン・ヒストリカル・レビューなど三田に五部もあったことがある。そうしたものを少くして、購入費を有効に使用しようという理屈は誰しも分っていても、思想統制だなどと反対する教員もおり、同じ研究室でも日吉は館長の承認を得ないで済むのは不公平だなどと言われた。

十九年の規定は全塾的なものから始まったが、時局の切迫から三田とその付近にある本館、研究室、研究所に限られ、ともかく成文としては未確認であったが、事実としては認められ実行された。ところが二十四年の規程は本館と分館には図書の管掌ばかりでなく、副館長の人事なども規定されたが、研究室は中央図書館制度につかず離れずの関係に立って、絶えず図書館に反撥する立場になった。

十九年にはすらすらと通過したものが、二十四年以降難航を重ねたのには研究室の成長ということが考えられよう。三田の研究室は大正六年に富岡甲子郎が係に任命された。場所はもと、図書館があった煉瓦の旧塾監局の二階北側の東に面する一と部屋であった。大学を真理の研究所たらしめるには、この貧弱な研究室ではだめだと主張したの

は、幹事石田新太郎であった。「研究室のない大学は宛も鼻のない顔面のようなもので、奈何にも間抜けに見えてなりませぬ。復旧工事（大震災の）を終えたならば、西北から今の図書館を抱擁する堂々たる研究室の出現に努力すべきであろうと思います」（三田評論大正13・10）とまるで今日の三田情報センターを予言しているようなことを述べている。震災後、煉瓦の塾監局は取潰され、今の塾監局が建ち、研究室は初めは二階北側に、次いで三階北側に移った。昭和十二年現在第一校舎と称する建物が完成した次には、それと並行して同程度の大きさの研究室棟が建つ予定であったが、戦時下の不急建築と認定され、鉄材が下付されなかったので実現されなかった。その間、図書の増加もあり、部屋も狭くなったので、空襲が始まる直前、第一校舎二階二十一番教室に引越し、三学部が一室に書棚で区切り、共同使用した。十九年九月研究室設備委員会幹事に気賀健三が任命され、二十年三月には整備委員として松本正夫、島谷英郎、池田弥三郎（語研）伊東岱吉（亜細亜研）柄沢日出雄（図書館主事）がなった。事務員には富岡が大正十三年異動してからは、しばらく欠員であったが、この頃は女子一名が勤めていた。十九年の規定のときはこの様な状態であって、図書館に委せる態勢であったのが、戦後二十二年十月には平山栄一が研究室主事になり、数日にして田中市郎衛門と交代した。二十四年には田中主事の下に人員も整備され、図書選択の教員数も増加したので購入請求証の取纒めも煩雑になり、かてて加えて田中主事は図書館の柄沢主事とは仲が悪く、図書館長は「野村天皇」と呼ばれて若手教員から怖れられていたので、図書館と研究室との間は阻隔されて行く傾向にあった。

しかしその間にも図書管掌はまがりなりにも続けられた。少額の予算を最大限有効に使おうとするには綜合目録が必要である。目録カードは各館および日吉研究室では一枚余分に作って、本館に送付された。三田研究室は人手不足

北里記念医学図書館

を理由に拒んだので、購入請求証を基に図書館でカード一枚作製し、各館別著者名順の綜合目録が第三事務室の一隅に並べられた。

本館分館の関係は図書管掌の外に、人事の選定・交流を行う意途を持ち、進んでは従来まるで無関係であり、疎外さえあったお互いの壁を漸次取払うことを願っていた。その具体的説明に入る前に、各館の成立過程を語っておきたい。

四谷の北里記念医学図書館は初代医学部長北里柴三郎の死去により、その同志門下生の間に企てられた記念事業として、募金三十万円で、昭和十二年十月七日竣工したものである。義塾は北里博士との密接な関係から、医学部構内の土地を記念会に提供し、建物落成の上は管理経営は義塾にまかされるが、北里記念医学図書館の名称は永久に保存し、その利用は学内に限ることなく、医学関係者すべてに使用させることを約束した。このようにこの図書館は義塾に委託されたという形を永く続け、昭和十九年三月十七日になって初めて正式に、

慶應義塾藤山工業図書館

義塾に帰属した。館員は初め医学部事務員豊島金松が兼ね、建物竣工の十二年五月には高木武之助が招聘され、基礎作りをした。義塾帰属後は監督として鷲巣尚、谷口虎年を経て、二十四年四月草間良男が就任した。この頃、図書館規程が成立したので正式には草間は副館長、対外的には館長と唱え、図書館商議会の構成メンバーの一人として、発言に大きな力を持っていた。それというのも草間はスタンフォード大学医学部出身で、慶應では公衆衛生講座を担当し、古くからロックフェラー財団と関係があったが、終戦後、連合国軍の衛生福祉局のサムス准将と親交があって、医学部の復興には貢献する処が大きかった。図書館の修復、雑誌類の整備などもロックフェラー財団やチャイナ・メディカル・ボードからの基金によって賄い、図書館のアメリカナイズも急速に進んで、利用されやすい図書館としての道を順調にたどって行った。

慶應義塾藤山工業図書館は大正四年藤山雷太の計画せる財団法人藤山工業図書館が基である。計画は古かったが、建物

は震災などで遅れ、昭和二年九月竣工した。藤山は慶應卒業後、三井系の工業会社数社に関係を持った関係から、工業報国の志を以て、晩年この図書館の建設になった。雷太歿後は藤山愛一郎がこれを継ぎ、建物を増築し、十九年三月二十八日慶應義塾に寄附された。財団法人時代は中島睦玄が主事となり、同館内に科学知識普及会を設立し、外国の技術関係雑誌の論文抄録などを速報し、専門図書館として異色ある存在であったが、慶應に併合されると初め監督に佐藤信彦、事務員に伊東弥之助が派遣され、公開図書館であるとともに、工学部付属図書館としての色彩を強めて行った。戦時中は建物の三分の二は海軍省法務局に貸与したが、それがため楼上に焼夷筒の落下があっても、水兵らの消火するところとなり、無疵で終戦を迎えた。終戦後は連合国軍の接収を避けるため、模様替えを急ぎ、日吉で校舎を失った工学部の教室や三田の考古学研究室をいち早く導入するなどの苦心をして、保全を全うした。しかし工学部が溝口や小金井などの遠隔の地に移転するとともに、公共図書館としてしか存在の意義がなくなったので、二十三年末にはこの建物は売却して、三田の旧福沢邸跡に再建して学生らの便にしようとする案が可決されたが、買手が見つからぬまま、二十四年になった。この時の副館長は野村が兼任した。

図書館規程が出来たときは分館はこの二つであったが、その後増えたものも一括して述べよう。

図書館日吉分室が出来たのは二十五年五月であった。終戦前までは日吉に大学予科があって、その第二校舎の西北側一階全部が図書室であった。書庫二十坪、閲覧室百二十坪のものである。これは仮のものであって将来はもっと大きな図書館を建てたい。十三万坪を越える日吉の敷地に大学経営者は当初色々な空想を馳せた。小泉監督であったというから、昭和の初め頃であろう。「この時、小泉館長はじめ館員たちがつれだって、図書館建設地の下検分に出か

けたことがあった。デコボコした丘の雑木林の中には松の大木が生え、栗林もあり実などがなっていた」と国分剛二は回想する。（塾監局小史）はじめは今日の記念館のところに大図書館をという意見であったようだ。しかし時勢が悪く、戦争は激しさを増す一方で、大図書館は遂に夢に終った。第二校舎は鉄筋コンクリートであったので、戦火も無く完全な姿で終戦となったが、すぐ連合国軍に接収された。そして図書室の図書や器具の撤去を求められたのは、翌二十一年三月であった。第二校舎を米軍のインフォメェション・アンド・エジュケェション・スクールとするからという理由で、即刻米軍の自動車が図書や器具を登戸仮校舎に搬出した。

二十四年十月日吉接収が解除されたが、旧図書室は書架も机も椅子も何もないガランドウであった。復旧工事は戦前この図書室に勤務していたことがあるということで、伊東主事が派遣され、本館から岩崎、登戸で図書を保管していた江田範保がスタッフとして予定された。工事は万事元の通りということであったが、伊東が意図したところはなるべく明るい、気安く入れる図書室ということを念願とした。旧図書室は窓外に神代杉が植えられ、部屋を薄暗くした。器具の色も濃褐色であった。これは恐らく本館のゴシック様式の影響であったろう。それを変えて黄色にしたり、閲覧台を緑色にしたりした。又、本館でも藤山でも閲覧台は閲覧者よりも高く位置していて、裁判所の如く、風呂屋の番台の如くであったのを、閲覧者と係員の顔が同一になるよう低い閲覧机に改めた。それは多分マッカーサー司令部によって作られた日比谷映画劇場前の、日東紅茶のグリルが図書館となって開放された様式の影響が頭にあったことに依ろう。開室の時の図書は登戸に保管された旧図書室のものの内の和書のみであった。

登戸にあった図書のうちの洋書は、日吉に新しく造られる日吉研究室に振り向けられた。研究室は二十五年上田保

が主事になり、元の寄宿舎北寮を改造し、二十六年四月開室した。日吉分室は初めから分館として出立したので中央館との連絡は充分とれた。日吉研究室もこの時からの出発で、範を日吉分室に求めていたので、分館ではなかったが、中央館には協力的で、綜合目録用のカードも送ってきた。

も一つは、小金井に本拠を定めた工学部の図書室である。工学部が日吉にあった頃、徳川武定旧蔵の戸定文庫を中心にした図書室があり、教授松山武秀が監督をしていたが、閲覧開始を見るに至らず、空襲で失われてしまった。そこで一時、藤山工業図書館を利用していたが、二十五年から二十六年十一月にかけて小金井に機械工学科教授室と同居した建物が出来た。鉄筋コンクリート二階建の書庫二十四坪と木造モルタル塗の閲覧室三十六坪、事務室十三坪のもので、監督は梅沢純夫教授であった。この方は新しくはあったが、三田と遠く離れており、教授の意向が強く、独特の目録カードなどが採用され、同一歩調に欠けた。

この様に分館・分室は成立過程を異にし、本館とは全く別箇に運営されていたから、人事の構成・予算規模・施設や目録・分類に至るまで、何一つとして相違しないものはないといった状態であったから、こうした制度が確立されたからといって、始めから統制のとれたものが出来よう筈がない。しかし、この制度を育てて行こうという意志は各館にあった。思惑の相違もあり、時々の首脳によって消長の差はあったとしても成長への努力は絶え間なく続けられたといってよい。殊に人事において分館の主事はおおむね本館の斡旋によった。医学図書館の佐野輝夫、工業図書館の安食高武、工学部図書室の大鐘誠一など皆、分館の要請に答えたものであったし、人事刷新のための交流も多かったとはいえないが、話合いで行われた。図書の適切なる配置の相談も行われた。工学部図書室に工業図書館の洋雑誌

を、語学研究所に市河文庫を、医学図書館に小泉丹旧蔵書を、斯道文庫へ平岡好道蔵書を移譲せる如き、又重複図書を書き上げて、慶應義塾内の適当な場所へ分譲するなどの仕事は本館の努力に俟った。

中央図書館制度を発足させるに当って、分館が最も希望する処は、予算の拡大を本館の努力によって得たいということであった。しかし分館は、分館の所在する地区に付属し、その地区予算は独立採算制で、本館の属する三田と別の予算で賄っている。それら予算の合計は、三田本塾で集計され総予算を形成する。大まかにいって分権制である。従って分館はその地区の予算により作成され、本塾で一括した図書館予算を組み得なかった。従って分館が希望する図書費の拡大は本館の力では出来ない。せめては増額や臨時費の請求を、本館から理事に援護を求める程度しか出来得なかった。中央図書館制にのっとり図書館費を一本化して、図書館網の中で分配するなどは理想論であって、遂に出来なかった。

本館には綜合目録が試みられつつあった。但し各館別である。目録法が一定していなかったからで、一定させるには時日を用することであった。又、分館、研究室によっては一枚余計に作る能力を有しないものがあって、全地区が揃ったとは云えない。又、綜合目録は本来各地区にあると便利であるが、複写の発達していない頃なので望めない。そこで昭和二十九年より始った月報（新刊目録）に全館の図書を登載することに切り替えられた。月報編纂の打合せなどは連絡委員会の格好の議題であった。その他、塾内の相互貸借、各地で行われる図書館司書講習会への推薦、文部省へ報告の図書館統計の一本化、国会図書館編纂の綜合目録への協力、慶應義塾総覧掲載記事などが相談して行われた。

さて、第二の問題に入る。規程の第二章第十五条に図書館の構成員が示され、第十六条では主任司書、第十七条で司書の規程がある。これは当時論議がやかましく、翌二十五年四月に公布された「図書館法」に対処するものであり、規程の最後につけられた図書館学研究会の設置は、この研究会を重ねることによって司書の養成に勤めようとする、プロフェッショナルな図書館司書を作ろうとする意思のあらわれである。図書館学研究会は早速、二十五年五月十一日に野村館長が「イギリスの図書館」と題し、次で六月廿二日には東洋文庫長岩井大慧が「北京訪書余談」を講演した。会場は図書館記念室で、館員の自由聴講であった。

こうした研究会を重ねても、随筆を読むようなもので、館員としての教養にプラスになっても、専門家としての規準にはなり得ない。そこで「図書館法」発効によって、司書及び司書補の資格の確定を機会に、暫定的に司書、司書補手当をつける案が連絡委員会で検討された。暫定というのは「図書館法」は公共図書館を対象とし、大学図書館のそれではなかったからである。二十五年九月頃より他大学の意向などを尋ねたりして研究を重ね、二十七年九月司書、司書補には五百円から三百六十円の手当が支給されることになった。この時、同時に役手当三千円から千五百円、邦文タイピストなどの技能者には三百六十円支給されたから、塾当局の考えは司書手当を技能給と考え、図書館の専門職としての司書とは、大分へだたりがあると思われたが、兎も角も司書に手当がついたことは前進だと評価された。こうなると司書、司書補の資格を得ようと講習会や学科受講者が自づと増え、館員としての意識の高まりが出たことは争えない。

司書手当がついたということはプロフェッショナルへの橋頭堡だと思われながら、その後、一向専門職制が確立さ

れなかったのは、大学図書館における専門職の専門的業務とは何かということが明確でないことであろう。専門学者の集まりである大学内にあって、図書館の専門職的業務は非常に限られた分野になってしまうであろうし、他の事務系職員のなし得ない専門的業務とすると、図書館員になし得ない事務職の専門的業務もあることで、一種の技能給になってしまう。むづかしい問題である。

第三の館長選衡方法に入る。従来は塾長の任命制であったのに対し、第二章第九条では「図書館商議会に諮り塾長が之を任命する」となった。図書館商議会は館長の諮問機関であると共に、銓衡機関でもあった。商議会の構成員は各学部推薦の教授二名宛に、主事以上の本館分館の図書館員を以て構成される。館長銓衡の見本として第一回商議会の模様を稍詳細に述べよう。

当時の商議員は経済学部から高村象平・小池基之、法学部から島田久吉・津田利治、文学部から松本信広・厨川文夫、医学部から草間良男・谷口虎年、工学部から梅沢純夫・水野正夫であり、図書館から野村・柄沢・伊東・石川・安食・佐野の十六名であった。二十五年二月二十四日の第一回商議会には理事永沢邦男が出席し、館長候補を三名推薦する。但しこれ以外の人を選挙してもかまわないが、その時は一応理事会で諮って決定したいと説明した。議長として草間が選ばれ、当局推薦者の名が読み上げられた。それは野村兼太郎、間崎万里、前原光雄の三名であった。議長はこれ以外に適当な候補者があるかと尋ねたところ、草間良男、栖原豊太郎の名をあげた人がいたので、候補者が五名となり、単記投票の結果、野村が十四票中九票を得て当選、次点は間崎であった。

館長の任期は二年であったから、二年毎に銓衡があった。銓衡の前年に新商議員が推薦され、その人々によって投

票された。以後

昭和二十七年四月十七日　当選　野村　十六票のうち十四票　次点　草間良男
二十九年三月二十五日　〃　〃　十六票のうち十一票　次点　松本信広
三十一年三月十五日　〃　〃　十六票のうち九票　次点　松本信広

四回にわたって野村が連続当選した。商議員十六名のうち六名は図書館員であることが、館長の再任を重ねることになるという批判もあった。事実投票とするには人数が少なすぎた。誰が誰に投票したろうということが容易く想像され、館員には投票がやりにくかった。

なお館長候補者に身分的制限を加えないところにも新鮮味があった。教授ばかりでなく、助教授でも、司書でも選ばれることがあり得た。しかし館長は名声ある教授がなるべきだという考えが、日本の大学の通念であって、図書館生え抜きの司書から図書館長は遂に出なかった。学長が諮問して館長を任命するのはどこの大学でもそうであったが、多くは教授会に諮ってのことで、選挙による例は真に少い。早稲田大学は二十四年九月に、館長選挙人会を作って選挙したが、構成員は学部長・教授主任・附属学校長・附属機関長であって図書館員は一人も投票権を持っていなかった。

慶應義塾図書館規程は理想にはしるものであった。その革新味のある条項のどれもが、完璧なる実施を見なかったことは残念であったが、これが成立したのは「図書館法」制定の前であり、他の大学図書館から高い評価をうけたものである。

## 七　オリジナル・マテリヤルの収集

野村館長はこれまで見てきたように、それぞれの場面で強固な決断力を以て、事物を処理して来て、著しい成果をあげた。しかし最大の努力は図書の収集と管理であろう。先づ図書館に於ける「貴重書取扱内規」が二十六年三月の商議会で討議され、可決されたことから記そう。

「一、貴重書は貴重書と準貴重書とに分ける

一、貴重書は館内の特別書棚に配列し館外帯出を許さず、館内の一定場所にて閲読する。但し展観その他特に帯出の必要な場合には公団体又は二名以上の責任ある者の保証、並びに館長の許可を必要とする

一、準貴重書は館内閲覧は自由であるが、帯出には予め館長の許可を必要とする

一、貴重書の選定規準は左の如く定める

1　洋書は第十八世紀以前のもの（一七九九年以前）

2　和書は江戸時代初期活字本以前のもの（一六二三年以前）

3　漢書は宋元版以前のもの（一三六七年以前）

4　著名人の署名したもの又は手択本等

5　福沢先生に特別の関係あるもの

6　出版年次については規準外ではあるが特に貴重と認められるもの。その選定は専門家の指摘せるものを図書館連絡委員会に於て審議し、リストに作成して教授会の意見を徴し館長の許可を得てこれを定める

一、準貴重書の選定規準は次の如くである。

洋書においては大体一八五〇年以前のもの、その他前項の規定に準ずるもの」

この内規は貴重書をこれから収集するために作られたものではなく、寧ろ今迄別置され、閲覧に直ちには供せられなかった図書があまりにも多かったので、此際整頓しようという意味で作成されたと言った方が正確であろう。従前、そうした別置書には赤ラベルを貼られた。その中には真に貴重なものの外、思想関係による禁閲書、風俗関係のいかがわしき図書、館外帯出されると他の閲覧者が迷惑する最新の統計書などがあった。特に戦争中、禁閲図書の激増したのを、又永年にわたってその時々に禁止された図書に統一がなかったのを正そうとしたのである。内規による貴重書準貴重書に限って、思想関係や風俗に関する図書は大幅に閲覧されるようになった。

野村館長の図書の収集の努力の中心は東洋・日本の原資料にあった。大学図書館は言う迄もなく、一つは学生の勉学に必要な図書を取揃えて、研究の便を計り、指導することであり、他の一は専門家のために善本を揃え、異版を集め、原本による根本的研究を可能ならしむること、この二つの使命を兼ねなければならない。この二つを同時に一つの図書館で行うことには大なる困難を伴うものであるが、学生に対する図書の収集については、かなり行きとどいていた。図書館に対して評価の辛い書誌学者長沢規矩也の言を借りると「各大学の付属図書館の中で前者（学生用）が徹底しているところは案外にもほとんどない。わたくしはかつて関係した各学校の蔵書は、ほとんど全部を片はしから手にしたが、東大などはこの点から観察するとだめである。わたくしが調べた範囲内では本学慶應を第一とする。各方面の参考書が実によく備わり、しかも受入れてから閲覧用に公開されるまでの期間が非常に短くて、大学図書館中最高の評価にあたいすると感じた。」（三田評論昭和39・4）これは戦時中、講師をしていた関係で知っていたわけであ

る。

他の一つはどうであろうか。これまで館長（監督）に経済学部関係の教授が多く就任した故か、海外の経済学古典書の収集の如きは誇るべきものであり、蔵書の数は多くなくとも、粒が良いとの定評は内外に認められていた。慶應義塾は洋学塾から出発した。福沢諭吉は東洋の学は西洋の学に及ばざる事を知って、洋学の特徴を採り入れることに専念した。その伝統がこの図書館の中に受け継がれた。しかし百年後の今日、福沢が生きていたら、なお同一態度を続けたろうかと野村は疑問を投げる。そして野村は言う。「今は単なる洋学塾ではなく、一大綜合大学である。創立以来、まさに一世紀を経て、その研究も広汎になった。殊に戦後アジア諸民族の覚醒は著しく、欧米学者の東洋研究も盛んになって来た。新しい観点から東洋学を見直すべき時期であると思う」（和漢書善本解題序）

野村館長就任当初の大物の購入は市河三喜博士蔵書である。そのうち英文学に関するものは東京大学へ行き、東洋に関する欧米学者の研究書は慶應に譲られた。その仲介したのは西脇順三郎教授であった。十九年の戦争末期の折であったので、トラックの使用も出来ず、学生も勤労動員で留守であったので、厨川文夫を初めとする文学部の教授達が、牛込山吹町の市河邸から、リュックに背負って幾度か図書館へ運搬する労苦がとられた。これらの図書は欧米、中国、朝鮮、蒙古等の言語のものを網羅している稀覯なものであったので、新潟十日町への疎開の中に組込まれた。戦災で図書館の復旧が遅れ、整理も手間取るので、戦後語学研究所に移管された。その内容は「市河文庫目録」として言語文化研究所から三十八年出版されたから、容易く知り得る。

敗戦による窮乏から、従来秘蔵されていた日本研究のための重要な原典が市場に出され、時に海外に流出するもの

も少なしとしなかった。かつて第一次大戦で敗戦国の貴重図書が戦勝国、殊に米国に大量流出した轍を、日本が踏むのを坐して見るのは悲しむべきことであった。資力不充分な慶應義塾の中にあって野村はなおかつ、それを防止しようとした。戦後、財閥解体、財産税の徴収によって窮地に立された三井家は、三井文庫を手離さざるを得ない状態になった。その所蔵資料は三井家三百年の文書・記録類など十万点にのぼるもので、近世社会経済史資料として貴重なものであった。野村は慶應で全部を買入れられない場合は、せめて帳簿類でもと考えて内交渉したが、金額の点で折合わず、そのうち米国へ搬出と定まったという噂も立った。三井の話は結局うやむやになって、土地・建物は文部省が引取り、資料は文部省史料館に寄託され、其後、独立文庫となって無事日本の地にとどまり得た。二十四年桑名藩文書四百六十二冊（御仕置類例集・所司代日記など）を、二十五年には安藤昌益の自筆本を含む昌益関係本を、二十六年には近世初期の医師曲名瀬文書一括、二十七年には新井白石自筆の日記を購入した。当時こうした高価な貴重資料を買いむかう姿勢にあったのは奈良の天理大学図書館であった。文化は東から西へ移ると悄愴する人もいるし、貴重書を天理あたりに買われてしまうのを傍観しているのは、国立公共図書館長の怠慢だと責任を追求する人も出た。そのさなか、市場に出た珍書は天理大でなければ慶應に入るという評判がたった。野村館長は学術的に価値あるものは集める。値段はかまわない。高くても収集に努力する。その揚句、金の工夫をする。そして万一出来なければ、その時放棄しても仕方がないと考え、この方針を時の財務理事神崎丈二に腹を割って話した。神崎は賛意を表して、財務理事は金をつくるのが仕事だから努力しよう。そうしたものは一度逃したら悔を後に残すことになる。大いにやりなさいと激励した。館長と理事の呼吸が合い、収集の直接の接衝は主として司書阿部隆一がやった。阿部は十六年文

学部哲学科卒業、文学部助手になったが、二十一年退職して、九州福岡にある斯道文庫に勤め、司書の経験をつみ、二十六年六月上京して図書館嘱託となり、二十八年九月正式に司書に就任した。

阿部が最初に手がけたものは大正七年卒業生の卒業三十五周年記念の寄附金による古刊本の収集であった。一誠堂・村口書店などを駆けずり回って古刊経、五山版、古活字本等、二十八部六十三点の善本を購入した。二十四年から交渉に入って二十六年になって、やっと入手したものに元教授幸田成友の蔵書の一部がある。幸田蔵書の価値は多くの愛書家の等しく認むるところであって、その去就は注目されていた。換金の必要があって、その一部を手離すはめになった幸田博士の苦悩は大変なものであった。どの部分を手離そうか、どれを残してどれを譲ろうか、それが三年もの経過になった。図書館との仲介に文学部の教授達が中に入ってその調停に苦労した。「はっきり申しますが、先生はもう少し江戸っ子らしく、さっぱりなさらないと、ものごとはスムースに行くものではありません。楠林とても長年の御出入でへいへいいっていても、腹の中でどう思っているか分りません。一寸面倒の口ぶりを聞きました。先生はものに執着なさりすぎて物を失い、人を遠ざけておられると思います。暴言ごめん下さい」は仲介の一人で愛弟子の吉田小五郎の手紙の一節である。この時、図書館に譲られたものは近世政治・経済論著と町触などの法令書が主であった。

幸田博士はその後二十九年五月に歿った。そこでその全蔵書を引きとることになった。量は八千五百冊、和漢書のうち和装本四千、洋装本二千、洋書八百冊、地図二百六十部その他であった。尤も図書館の蔵書と重複する洋装本は市場に出た。和装本は江戸時代の写本を中心に、古版本、お伽草子など幅が広く、洋書は東洋関係の極めて特色のあ

る集書であった。和装本の中の幸田博士自慢の一つに、江戸時代の書林編集の書目類があった。幸田博士を尊敬していた横山重は、幸田文庫の慶應への収蔵を聞いて、好意を以て幸田博士の未所蔵分四部を図書館に提供して呉れた。しかし完璧とするにはなお四書目不足していた。それも横山の紹介によって京都の古書肆若林から提供された。こうして図書館は江戸時代書林編纂書目を全部収蔵し得たのである。

幸田文庫の中にお伽草子類が数点あった。中にも室町後期と推測される「藍染川」は稚拙素朴な絵に、細字を以て科白を人物の傍に記して絵詞となして本文を補い、見るものをして感動と愛惜を覚えしめる。これが動機とは云えないかも知れないが、其後お伽草子の収集が初まった。三十年・三十一年の文部省よりの私立大学研究基礎設備助成補助金により、横山重収蔵の諸作品が購入された。その中の「鳥歌合絵巻」や「子敦盛」などは「藍染川」や「扇合物かたり」（朝吹英二寄贈）と共に、この種の展覧会や編著には欠かせないものとなっている。

昭和三十二年には京都の公卿二条家より、慶長から明治に至る日次記（公の事務日誌）が入手された。二条家は元禄の昔、尾形光琳・乾山のパトロンであったから、この日誌の中に行き来した記事が発見され、その紹介は学界の注目を浴びた。同年、九州人吉の大名相良家より相良文書の購入が決定された。これは義塾で古文書学を講じていた伊木寿一の推薦によるもので、七百年間、同地方の支配者であった相良家資料三千余点は、各時代各分野を通じ稀有の史料であることは当然であるが、既に史料編纂所の「大日本古文書」に印刷し、刊行されていたので、その購入には躊躇があった。しかし伊木講師の執心に押され、初めはロックフェラー財団の援助を得ようとしたが失敗し、次で文部省の助成金で購入に努めたが、偶々熊本大学でも同一助成金で相良文書をという計画に鉢合せして破談となり、最後

に分割払ということに相良家が同意したので収蔵が決定された。

以上のような纏ったものではなく、買い集めて体系的集書にしようと欲したものに近世名家の自筆稿本・手択本・書翰類があり、日本文学書を歴史的に一通りは揃えようとする希望もあった。前者は野村自身の学問的興味も手伝って積極的であり、前記の新井白石日記の外、荻生徂来の徂来集稿本、その他太宰春台・中井履軒・伊藤東涯・和学関係で狩谷掖斎・伴信友・平田篤胤のものなどがあげられる。後者は横山重から収蔵された室町末期文学書、小田隆二から購入した江戸初期文学書、更らには水上・馬場文庫の戦災による焼失を詫びる意味もかねて、明治初期文学書にも手を出した。これらは一大集書となるに至らず、野村はやめた。寄贈された主なものを次に挙げよう。二十五年七月極東軍事裁判の弁護人大原信一より厖大な裁判記録の寄贈があった。トラック二台で運ぶ程の量であった。軍事裁判関係では日本の無罪を主張したインド公使館からも寄贈をうけた。二十六年には柳満珠雄より父荘太郎遺蔵の和漢書があり、二十九年には折口信夫遺愛の寄贈本四種がある。久我家旧蔵の室町時代古鈔本で、うち「重家集」一帖と「林下集」二巻は戦前重要美術品に指定されたものである。同年には大正三年卒業生の寄附によって、福沢諭吉の父の百助の遺愛の品であったという「上諭条例」の寄附がある。百助がこの本を偶々手にし得た時、男子が生れたという報を得て、喜んでその一字をとって諭吉と名付けたという逸話のあるもので、塾にとっては真に記念すべき本といわねばならない。三十一年には松下隆章講師の斡旋で反町十郎収集の武家文書百八十点の寄贈があった。足利尊氏より徳川光圀に至る間の、有名な武将の殆んど全部を含むもので、内容は教書、感状、下知状などから沽券類も含まれて多岐である。

寄贈のもので最大のものは斯道文庫であろう。財団法人斯道文庫は昭和十三年十二月、麻生太賀吉が九州福岡に設立した日本並びにこれに関聯する東洋文化の研究所である。太賀吉は九州大学教授河村幹雄の薫陶をうけ、河村の斯道塾に一時起居したので、創設の文庫にその名を採ったという。ところが二十年の空襲で財団の家屋その他研究施設は一切灰燼に帰し、僅かに書庫のみとなったので、財団法人は解散され、麻生産業株式会社が保管責任者となったが、死蔵を恐れて九州大学文学部に七年の期限を附して寄託したのは、二十六年三月のことであった。

文庫の蔵書は約七万冊、内容は日本儒学、国文国語、仏教、国史、東洋史、中国文学等の和漢書で、その範囲内で江戸以前の刊写本と明治後の学術書がほぼ均衡を保って集められていた。この中に貴重本としては橋守部、松崎慊堂、安井息軒らの手稿本、書入本などがあり、日本儒学に関する未刊写本類と共に、その方向の研究には欠くべからざるものがあった。

三十三年三月は斯道文庫の九大文学部へ寄託の期限であった。九大は元よりその寄託の継続を望んでいたが、麻生太賀吉は図書の保存のみでは満足せず、東洋古典に関する学術を研究する機関を設け、当初の理想を実現し得る大学への寄贈を望んでいた。野村には慶應義塾には亜細亜研究所が終戦と共に廃止されてから、真の意味の研究所がないことをかねがね残念に思っていたので、それを得られれば、それを足がかりとして大研究所の建設を目論見たいとした。しかし図書館長ではその創設は権限外なので、もし実現出来ざるときでも、図書館の外局として維持する。それには白金の藤山工業図書館の一隅を当てたいと考えて、その招致に熱心であった。麻生側も事業上、慶應出身者に知己が多く、また三十三年は創立百年祭も行われるのに祝意を表して、慶應義塾に文庫を寄附する決意をかためたので

あった。寄附が正式に定り、その受納は三十三年六月で野村館長退任後であった。

## 八　文学部図書館学科の創設

ここで昭和二十六年に慶應義塾内に創設された図書館学科のことを述べて置こう。初めこそ図書館学科は図書館と関係が薄かったが、前原館長の頃から次第に歩みより、佐藤館長の代になると、館長の出身が同じ文学部ということから、図書館学科と緊密な関係を持つ過程をたどるからである。

第二次大戦の終結によって連合国最高司令官（ＳＣＡＰ）から日本政府に発せられた指令は「日本教育制度に対する管理方策」であった。文部省は総司令部民間教育局（ＣＩＥ）の命に従わなければならない。戦時中禁閲された図書は解禁され、逆に占領政策に障害となる図書の没収が初まった。ＣＩＥライブラリーが東京初め各地で開かれる。アメリカ色一色に塗り潰されて行ったが、図書館に限らず、大学が、いや日本全体が資材不足の克服に、家族の生活維持にのみ懸命であった、その頃の事であるから、米国もしくは占領軍の言う儘について行くか、その後援を頼む方途しかなかった。慶應義塾図書館でも焼けただれた鉄骨を露出した建物と、埋高き図書の山をかかえ乍らも、ＣＩＥから指令された学術研究会議の学術文献総合目録特別委員会内の、技術研究会で計画した、学術文献総合目録調整事業の東京地区の末端館として、館員は徒歩でその調査に協力した。それは二十二年の早春であった。

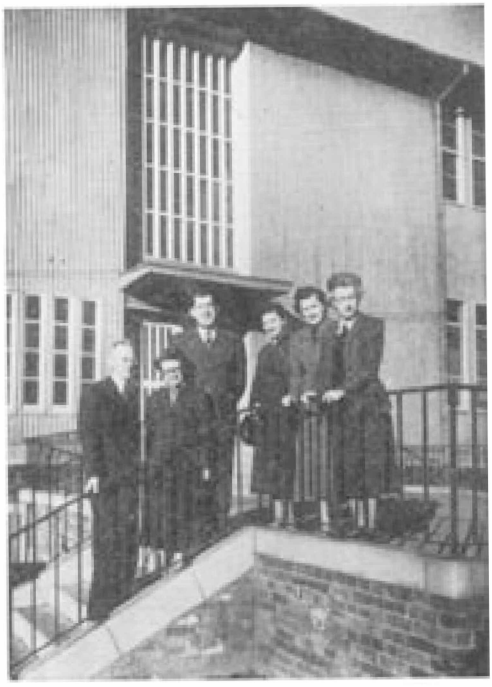
同年の暮には米国議院図書館（ＬＣ）クラップ副館長と米国図書館協会（ＡＬＡ）ブラウン会長とが、国会図書館建設の助言のために来朝し、僅か一ヶ月の滞在の間に、その構想を覚え書として残し、その儘、国立国会図書館法として

二十三年二月成立させた。そしてその夏、イリノイ大学図書館長兼図書館学校長ダウンズが、同図書館顧問として来朝した。そのダウンズが一年置いた二十五年六月再度来たときは、日本に図書館学校を創設のための委員長としてであった。この年の四月「図書館法」が成立し、図書館の奉仕機能が拡大され、それに伴って図書館員の資質向上が要求される。それなくしては新図書館法は完全に実施さるべくもない。そこで当然、司書講習所や講習会が生れた。それに対し、米国側ではＡＬＡに委嘱して、日本図書館学校創設委員会（ＪＬＳＣ）を組織して、検討が初められた。米国に於ける経験から、図書館学科を初めは米国の資金で作り、後に自立出来るように計画を立てた。司書の養成によって、民主的な奉仕活動を充分ならしめようとするものである。

ダウンズは東京、京都、同志社、早稲田、慶應の各大学を歴訪し、独立の図書館学校を創設するより、既設の大学の中に一学科として、付設する方が良いと思い、更らに京都より東京の方が地理的に好都合と判断した。ダウンズは七月四日と十九日、慶應で潮田塾長と野村館長に会見した。この時、潮田は官学と私学との区別、新学科は私学に於てこそ、その特質を発揮し得る所以を説明したが、「しかし義塾は戦災をうけたので手狭であり、提供し得るものは教室二つに過ぎない」と語った。ダウンズ帰国後、数ヶ月を経た同年末、ワシントン大学図書館学科長ロバート・エル・ギトラーが日本図書館学校主任の資格をもって来日し、再調査の揚句、慶應義塾を最適と認める旨の報告を、二十六年一月二十一日付でＣＩＥに提出し、協定事項の確認を経て、正式通知がＣＩＥ局長ニュージェント中佐から塾長宛にあったのは二月五日付であった。当時、塾の外事部長であった清岡暎一は、戦災後の教室の貧弱さからいって、慶應が撰ばれることは到底望み得ないと思っていたのだが、「結局、塾の精神的特長が物的不足より高く評価」

されたのだと述懐しているが、事実そうであったろう。ギトラーは英訳「福翁自伝」を手にして、感激して慶應にきめたそうである。

日本図書館学校（ＪＬＳ）は外部に対しての名称で、大学としては文学部に一学科増設ということであった。米国はその創設費として、二十六年四月から二十七年六月まで十万弗を支出し、講師五名（内一名は主任）を派遣する。この期間中、学務は主任と学部長との協議により行い、ＡＬＡとＳＣＡＰとの共同監督下におかれる。そして二十七年六月以降は義塾が負担するという約束であった。この事実が図書館に知らされたのは二十六年一月末であった。折から柄沢主事はガリオア資金並に米国陸軍省及び国務省の招聘によって、図書館管理伝習のため二十五年十一月米国に出発し、留守であった。又、二十五年十二月は塾長の改選期にあたり、野村館長はその有力候補の一人にあげられていた関係もあって、図書館には欠席勝ちであった。そこでギトラー主任と図書館側との最初の接触は、清岡外事部長を通訳にして伊東主事があたった。それは二月十日の事である。清岡は義塾の方針として、図書館学科を育成せねばならぬから、最大限の便宜を図るよう希望すると述べた。伊東は義塾の方針とあれば協力するのが当然であるとして、図書館学科の実習室を目録カードが並べてあった、第三事務室全体をあてることに同意した。ところが野村館長が間もなく出勤して、貸与面積が広すぎるといって、縮少交渉をしたので、図書館の中に教室を持って、学生を養成するのを理想としたギトラーの教授法は変更された。そこで図書館に一番近い建物の第二校舎が選ばれ、学校側では見晴らしの好い二階を、というのを断って一階にしたのも、ひとえに図書館に近くという考え方であった。そして縮少された図書館内の一隅は、レファレンス・ルームに宛てた。



図書館学科の教授達（中央ギトラー主任）

数日後、レファレンス・ライブラリアンとして布哇公共図書館のテーラー女史が来た。ほかの訪問教授も間もなく到着し、あとは開校準備に目の廻わる忙しさであった。図書館側でも三月には柄沢が帰国し、ギトラーと会い、両者の協調はうまくゆくかに考えられたが、中々そうはゆかない。学科の教授は皆温厚な良い人柄であったが、風習の違い、言葉の不自由さは誤解も生じやすい。四月七日に開校式が行われ、続いて授業となったが、一番初めの図書館とのトラブルは、学生の図書館入館口のことであった。

当時、図書館は教員と学生との出入口が違っていた。教員は正面玄関から入って、第三事務室で目録を検索して、書庫へ入る。学生は玄関の向って左を三、四段降りた地下室で学生証を出し、閲覧用紙をうけとって入る。地階から階段を二度登って、現在の小閲覧室のところに目録があって、閲覧台で図書を請求した。玄関と階段の間には木柵があって、館員だけが事務上通行する開閉口があった。ところが図書館学科のレファレンス・ルームは第三事務室の一隅にあったから、その利用にはどうしても玄関から出入せざるを得ない。ところが図書館学科の学生でも図書館を利用

するには他の学部学生と同様に、地下室から入らねばならない。それを面倒がって、図書館学科レファレンス・ルームから、館員の通用口を通って館内に入ろうとする。館員が目撃すれば咎めるが、館員がいないと入る者がいる。これは図書館の管理の上から困ると考えられた。開校してまもなき五月四日、ギトラー主任は伊東に図書館学科学生に対する意見を求めた。優秀な学生揃いだと答えれば満足したろう。事実、大部分は優秀な学生であった。現在のような純然たる学生は少なく、現職の図書館員もいたし、ＣＩＥの司書や、中年の人など異色あるものであった。その中の一握りの不心得者が規則を破って、柵を越して階段を登るのであったが、伊東はそれを指摘して、将来の司書たるものが図書館の規則を破るとは何事かと言った。ギトラー主任は大声をあげて怒鳴った。言葉がはっきりしなかったので、伊東が恐縮しないので、なお怒った。こうしたこともあって、ギトラー主任の心は図書館に対して心平らかでなかったろう。しかし、それでも図書が増えて書棚増設の希望があるとき、その他色々な注文はすべて通訳をつけて伊東に申出た。初めて会った図書館員だから心易かったのかも知れないが、伊東は迷惑がった。ギトラー主任に好感を持たず、館内ではワンマンであった野村館長に、伊東の口から取継ぐのは全く困った。

二十七年六月までの援助打ち切り後は、ロックフェラー財団の援助を依頼した。五ケ年計画でその援助は年々減少し、五年目には慶應だけで経営するという方法で、折から来日した同財団人文科学部門のファーズ理事を通じて申請し、これが受理され、二十七年以降も毎年人を替えて、訪問教授を迎えることが出来たが、ギトラー主任のみは三十一年五月まで引続いて滞在し、図書館学科の面倒を見た。

この間も絶えず注意やら、要求やらを図書館に申し出た。瑣細なことは省くが、一つ、いつまでも尾を引いて頑迷

固陋のように批判されたのは、学生を正面玄関から出入させよという主張に耳をかさなかったことである。玄関広間にカード目録を配して、受付を玄関に置き、教員と同じように出入りさせたら好いと言うのである。伊東もそれについては研究し、多少の習慣的困難さは伴っても、出来ないことではないと野村館長に進言したが、例によって反対であった。野村には三尺下って師の影を踏まずといった程ではないにしろ、教えるものと教わるものの上下はあるべきだとの考えを持っていた。そうした点は封建的とも言えた。話は古く高橋監督時代に遡るが、日米開戦が勃発すると同時に、空襲に備えて交代で宿直する案が、三辺主任代理から提案されたことがある。その時、伊東は空襲があれば宿直者は当然死を覚悟せねばならない。そうした決死の宿直者は優遇されて然かるべきで、館長室を宿直室にして貰いたい。宿直室と予定された半地階の室で、煉瓦に埋れて死ぬのは嫌だと言い張った。其後、実際の空襲が来たとき、そんなにすべてが死ぬものでもなく、また爆弾などが落ちたら、一階の窓の明るい館長室より、地階の方が爆風除け位であったら、寧ろ安全であったに違いないが、開戦当初はそこまで考えが及ばなかった。三辺と伊東は対立して、物別れになったが、それを聞いた野村はまだ館長ではなかったが、伊東を呼んで「館長は主人だ。館員は奉公人だ。奉公人が主人の部屋に寝るなんてことがあるか」と叱った。野村が館長になってからも、館長の出入口は玄関と決めていて、何かの用で図書館に戻ることが夜遅くなっても、館員の誰れかが待って、玄関を鍵で明けねばならなかった。そういう人であったから、教授と学生とが同一玄関から通行するなどは、思いも寄らなかったのであろう。学生と教員の出入口が別であったことは批難の的となった。図書館が古いというときには、必ずそれが持ち出された。

しかし野村館長も永い図書館長の終りの時分には大分変って来た。いや大いに変った。昭和三十一年九月、戦前か

らの親日家であったシンクレアー教授の作ったメモリアル・チェアーによって、布哇大学へ招聘され、翌三十二年二月帰国されたときは、布哇大学図書館を見て、サービスに徹した閲覧方法に共鳴した。出発前、閲覧室の一隅に開架書棚を二連置く案を提出したときに「自分は今の学生が信用出来ない」といって肯んじなかったことがあって、止むなく網棚の書架をならべて学生に指で押させる、閲覧方法をとっていたが、帰国後には開架でなくてはならないに変った。折から商学部新設のための校舎の増築と物理学教室の増設の必要から、日吉図書館分室の移転が決まり、そのかわり新図書館を建てることになった。降って湧いたように、急な諮問が宮崎澄夫理事から図書館に来た。日吉の学生図書館なら当然全館開架にすべきだと考えながらも、留守をしている野村館長の平生の言動から推測して、入口に監視員を置いて、学生も書庫に入れる形式の図書館を進言し、三菱地所部と折衝して設計図も出来上った。そしてそのことは布哇の野村へは一応連絡してはあったが、野村は帰国して登館するとすぐ、設計図を持ってこさせ、詳しい説明をさせた。そして宮崎理事に撤回を求めた。野村館長の要求する図書館は全面開架であり、その上、レファレンス・ルーム（これは前の設計図にもあった）や安楽椅子を置いて気楽くに読める部屋や、ジスカッションの小ルームなど、数々の部屋を含んだ図書館で、折から来朝中のライル教授の意見もとり入れたという。しかし、それは無理と思えた。敷地も定まっており、百年記念の募金の一部を費用にあてるのであるから、資金にも限度がある。困惑した設計者は全く新しい設計図を、一回、二回と持参したが、館長の気に入るところとならない。終いには「自分がいてはいつ図書館が出来るかわからない。目をつぶる」といって、出来たのが現在の日吉図書館である。館長には不満だらけであったろうが、全面開架の建物は兎も角も出来た。しかし其後、理事団の全面開架尚早論によって、閉架式にな

ってしまった。全面開架につくられた部屋に、わざわざ仕切りをして閉架としたのである。理事らは開架が日本の大学に適するや否やを調べに、立教大学図書館に見学に行った。当時、全面開架であった同図書館の館員は、紛失図書に対する係員の精神的苦悩を強調したそうである。

図書館と図書館学科はこう見て来ると全くの不和であったかと思われるかも知れないが、勿論良き影響もうけている。二十七年目録室を改造して図書館のレファレンス・ルームを造った直接の動機は、やはり図書館学科のレファレンス・ルームが図書館内に置かれて、いつもそれに接し利用していたからによる。初めのうちは大学図書館にこうした施設が必要かどうかが議論された。一部の館員はカレッヂまでは有用だが、大学図書館には不必要だと主張した。ところが二十六年の夏、図書館学科主催の図書館専門職員指導者講習会が慶應で開かれたとき、館員は十名それに参加した。其時チェニィ教授の指導するレファレンスのウォークショップに参加したとき、図書館内の実際の問題で論ずるということから、慶應の図書館にそうした施設がある方が良いかどうかから始まって、作るならどんな資格の司書が適当であるか、どんな図書を置くべきか、という風に進んで行き、とうとう「大学図書館における基本参考図書目録」作成という具体論になってしまった。反対論者もいたグループをこの様に指導して行ったチェニィ教授の手腕は買って良い。幸いレファレンス・ルームの設置に野村館長も反対しなかったので、ぐんぐん計画が実現にまで押しすすめられた。二十七年三月図書館学科を卒業した井出翁を最初のレファレンス・ライブラリアンとし、補助に毛利信吾が坐って、同年九月発足した。室は十七坪、四方の壁面にレファレンス・ブックを並べ、閲覧者は接架して自由に本を手にし得た。そして司書は利用者の質問に応待した。いや応待したというよりは、こちらから探がすものは何

かと問いかけるといった方が正確であろう。図書館員に質問して、答を得ようと考える人は当時、いないといってよかった。レファレンス・ルームを従前の辞書室位に考えていた人々にとっては、驚きであり、他の大学図書館からの見学や、該室の目録の請求などもあって、一と頃図書館の名物見たいに思われた。井出は一年でやめ、国際基督教大学に移って、更に大きなレファレンス・ルームを作った。井出の後任は河野徳吉、次で大谷愛人、丸山信とこの室の主任をうけ継いだ。

最後にギトラー主任について補足する。彼は初め在任一年の予定で、ワシントン大学から休暇を採って来日した。その時は日本占領軍の招聘によったものであったが、任期中、平和条約の調印によって援助が打ち切られるはめになった。それでは図書館学科の存続はむづかしい。そこでロックフェラー財団からの肩替りをえる努力をし、彼自身もワシントン大学の好位置を棒に振って、滞在を延期し、学科の基礎確立のために挺身した。そして五年後、藤川正信・中村初雄・浜田敏郎・渡辺茂男の四人の教員を養成し、後顧の憂なく、次の主任橋本孝に席を譲って日本を去った。慶應義塾はその時名誉博士の称号を贈って感謝の意を表した。彼は独身で、身うちには母親が、桑港の老人ホームにいた。親孝行な人で母親にはよく手紙を出していた。人生の一番良い、働き盛りの期間を図書館学科の建設のために献身した功績は、高く評価されねばならない。